



求道

第壹號

第三卷

求道第叁卷第壹號目次

◎本年の「求道」

求道

◎人生と信仰

◎信仰内面の光景

感謝

◎佛陀は吾人の生命也◎我子の夭折◎如來の御はからひ◎求哀懺悔

▲「羽村」の音づれ

講話

◎聖尊の重愛

聖傳

近角常觀

◎ジャータカ釋尊傳——佛誕生

告白

◎半生の追憶、信仰の告白

島中雄三

研究

◎讀書漫錄

講義

常盤大定

◎嘆異鈔——序說

嘆咏

近角常觀

◎我は迷ふ(長詩)

左千夫

◎小さき書齋(長詩)

甲之

◎友の文見て(短歌)

常音

時報

◎昨年の求道學會日曜講話◎女子信仰談話會◎第二求道會土曜講話◎第三求道會講話◎各求道會講話題

本年の「求道」

年の改ると共に本誌の体裁を多少改良しようと思ふ。回顧すれば一昨年の「求道」は主として人生問題に對する自己の信念を披瀝したるものにして、昨年の「求道」は親鸞聖人を中心として信仰問題を鑽仰したのであつた。そして何れも嘆咏諷誦の意味を持つたものであつた。其文字語勢皆之に叶ふ様に勉めたのであつた、而して主として自己の信仰を遠慮なく吐露して、其文章の頗る長々しきにも拘はらず、讀者諸君は熱心に御覽下されたは頗る満足に感ずる所であります。畢竟是宗教的同朋たるが爲に心絃共鳴する所がある故である而して今年は如何にして同朋諸君に酬ゆべきやが一問題であります。從來愛讀の諸君は必ず舊來の形に於て満足を表せらるるを疑ひませぬ。されど從來の社説は既に業に信仰に入りたる人が其經驗を深むる爲めに、又教理を研究せられたる人が之に實驗の味を見出すが爲に、確かに適切たりしことを信する。されど實際道を求めつゝある人に對して安心を與ふるにはあまりに回り遠く奥深すぎたと感ずる。又文字の如きも堅過ぎると思ふ、加之現に人生上

煩悶を求めて慰安を見出さんとするには一寸手につき悪き感があつた。勿論之れによりて信仰に入りて下さつた方も多くありたれど、寧ろ講話が適切であつたらし。而して求道學會及び求道會に來りて信仰を求めらるゝ人は三十二年に書きた「信仰之餘瀝」と私の微かなる經驗を書きたる「懺悔録」によりて道を辿らるが常であつた。此に於て現時求道の諸士に對しては此二書の体裁同様なるものが適切なることを感じて、一切文字を平易にするつもりであります。

第一求道欄は主として信仰問題につきて述べたいと考へる。信仰と一言にて云へど如何なるものか、如何にして入るべきか、如何に人生の上に顯現すべきか、且つ百般の問題を信仰の上にて如何に處理すべきか等を適切に且つ直接に述べたいと思ひます。從來信仰の經驗なき人に其眞境を知らしめたいと思ひます。即ち信仰外部にある人の手を執りて信仰内部に入る手引をするつもりであります。

第二感謝欄に於ては主として私が時々信仰上佛陀に對して感謝し奉る感念を直寫するつもりであります。即ち從來社説にあらはれたる自己信念の告白、佛智鑽仰の點を遺憾なく披瀝したいと思ひます。従て其文字も從來の社説の形を存します。此欄は全く一人が佛陀に對して申上ぐる心持を筆にしたるもので、現在々々の私自身の告白でありますゆゑ、信仰としては極めて直接なものであります。

第三講話欄に於ては從來の如く第一第二、第三の求道會に於て御話した其物を載せたいと思ひます。此欄は信仰内面の光景を描くのを主とい

たします。求道閣と相待て信仰に専らたしと考へる。求道閣にては信仰を或は縦に或は横にすべて實際人生の問題より言ひあらはすを主とするが、此欄に於ては信仰其物の内面の實感其物を出して讀者諸君が之に同感同化して共に佛陀の御慈悲に浴したいと存じます。

第四聖傳欄の目的は大聖釋尊を初として、當高偉大なる人格を仰ぎたいと思ひます。人格は畢竟信念の権化でありますから、信仰を人生問題より味ふには最も適當であります。親鸞聖人の如きは信仰でなければ分かつ、又聖人の一生を見れば信仰は味はずには居られぬ。嘗て佛弟子小傳を書きたるも原始佛教の實感を味ひ、佛弟子の人格及特徴を味ふためでありました。而して吾人の平素感とするところは最も信仰的なる釋尊傳のなきこととあります。そこで先づ「チャータカ」本生譚にある印度最古の釋尊傳を翻譯して載せ初めます。

第五告白欄に於ては主として同朋諸君の信に入られたる告白であります。是は從來私に非常に喜ばしく讀まして、頂いたもので、定て讀者諸君も満足せられたることと察します。畢竟煩悶求道の状態より安心感謝の状態にゆかれたる實感を辨つて、一は自己の心中を遺憾なく告白すると共に他の求道者の生ける手引をして下さるのであります。勿論信仰に入られたる已後の消息も此欄に入れるつもりであります。

第六研究欄は釋尊を中心として佛教の眞髓は如何なるものなるか。又親鸞聖人の文字の味は如何なるものなるか等。恰も聖傳欄と相對照し來りて研究を進めたいつもりであります。研究といふも從來の哲學的若しくは教理的に研究するのではなくて、實驗的に研究したいと思ふのであります。特に經文の如きは言ふべからざる佛陀光明の結晶にして、藏經は寶庫でありますゆへ、開闢せられたる結果を書きて置きます。又私が教行信證を味ひたる所感の如きも此欄に掲げます。嘗て書きたる『佛教の眞髓』の如きものも載せたい考であります。

第七講義欄は信仰上の金科玉條となるべきものを講義したいと考へ

求道

第參卷 第壹號

人生と信仰

信仰を離れて人生の眞意義を知ることは出来ぬ、信仰によりて人生に生命あり、力あり、意味あることとなるのである、否既に業に意味のありし、人生を始め、自覺することが出来る、若し信仰がなかつたならば人生百般の物何の爲に存在するか了解することは出来ぬ。

人は生れ始めしよりして此人生を誤解して居る、何人も人間は生活夫自身が目的であるかの如く考へてゐる、既に生活を目的とするものゆへ、或は位置、或は富貴、或は名譽を人生の目的であるかの如く考へる、故に此等の物のためには何物をも擲ても之を得ることを主とするやうになる、此に於てや政治家は位置のために政治を爲し、實業家は富貴の爲めに實業を爲し、宗教、教育等最も眞面目なるべきものでが名譽の犠牲に供せらるゝに至るのである。

かく考へることは世人の常として願みないところである

ます。諸方よりの寛恕もあり、よき機会もありたる故に『嘆異鈔』の講義を始めます。講義といへばとて、教理を述べたるものでもなく、後門を講究するものでもなく、ひたすら親鸞聖人の口より溢れてたる御言を味はして頂くのであります。定めて讀者諸君は嘆異鈔を暗誦して居らるゝ位でありませうが、御互に味ふても味ひ盡すことの出来ぬのが聖人の文字であります。

第八嘆異欄は從來の如く伊藤左千夫氏を中心とした同人諸氏の隨時の作を掲載いたしましたと思ひます、氏が故正岡子規氏の遺業を繼ぎて研究せられたる確實なる詩風と氏が清新一塵なき趣味とは蓋し文壇の異彩であります。而して今後彌々其の深奥を發揮せらるゝ事と思ひます、氏が毎號本誌の爲めに詩稿を寄與せらるゝ厚意は實に感謝の外ありません。

第九時報欄は第一第二第三求道會を初として、各地の求道會、又各學校内部に於ける信仰上の會合の様子等、信仰上適切なるものを隨時に報道したいと考へてあります。眞面目なる信仰上の御寄合のありたる節に御通知下さらば適宜に報道いたします。

已上は大體の體裁をのべたまでであります。必しも每號此諸欄をそろへると確定する譯でもなく、此他の欄も適宜に設けることもありませう。

本年の表紙畫は京都工藝學校教授工學士武田伍一氏が同情を以て本誌の爲に新に考案を立て且つ畫きて下さつたのであります。佛像は南都藥師寺の觀音の形を寫されたのであります。深く氏の御厚意を感謝いたします。

應身三十三。常觀其音聲。楊柳枝頭露。到處多月明。
(慈雲尊者作)

が、人生果して此の如き物ならば暗黒界たることは明瞭である、而して人生れながらにして此暗黒界にあるのみならず、吾人の信仰によれば、無始已來かく誤解し來つたのである、是が所謂無明である、此無明が本となつて煩悶も起る、苦惱も起る、憎嫉も起る、百般の邪念が起り來るのである、故に吾人が住する人世なるものは生れながらにして誤つて居るのである。

此誤のなき人、此無明なき人、明覺なる人が乃ち佛陀である、慈悲を以て満たされたる、智慧を以て満たされたる、無碍自在の心を以て我等を救濟して下さる方か覺者である、即ち佛陀である、我等は佛陀の恵みありて始めて人生の意味あることが分かる、本來吾人は生れながらにして、佛陀の慈悲を蒙りて居るのである、而して其恵みを蒙りつゝあることを自覺せぬのである、我等は我方にては一粒の食も一掬の水も飲食することは出来ぬのである、しかるに皆自分が作りたるもの自分が得たるもの、様に考へて居るのである。

信仰といふことは、畢竟此大なる恵みを見付けることである、此大なる佛陀の光明に接することである、此大なる親の慈悲を感ずることである、何もかも皆佛陀の大なる思召よ

私に適當に賜はりつゝ、あるのである。一切の順境、一切の逆境皆佛陀より賜ふ所の慈悲である。かく偉大なる御慈悲を蒙りつゝあることに氣付かして頂きたのが信仰である。今迄暗黒とのみ考へつゝあつた人生が全く佛陀の慈悲を以て溢れつゝあつた人生であつたのである。一粒の食も佛陀の賜ふ所なれば無上の價値がある。一掬の水も佛陀の賜ふ所なれば無限の生命がある。高き位置にあるも低き位置にあるも富貴たるも貧賤たるも、人の褒むるも毀るも皆廣大なる思召のあつての事である。

此によりて人位置高きが故に必ずしも貴からず、位置低きが故に必ずしも賤からず、唯此佛陀の御恵みを見認むると見認めざるによりて人生に意義あるとなさとの區別を生ずるのである。此に於て信仰の眼より見れば人生は全く平等である。階級の區別を認めぬのである。固より階級貧富貴賤の別ありとするも、夫等は決して此等人生の意義に何等の影響を認めぬのである。

かく信仰は人生に於ける真意義を見出すことにして、其職業の何れであるか、其仕事の何たるかを問はぬ次第である。釋尊の如き在家の弟子と出家の弟子との二種あるも、信仰の

出世的たるを要するものではない、此點に於ては、確に日本佛教は面目を一新したものである。印度の佛教は寧ろ世間的の形式であつたが、日本佛教殊に鎌倉時代の佛教は全く世間的のものとなつたのである。親鸞聖人に至りては全く在家的家庭的の宗教を宣布し、商をもせよ、奉公をもせよ、獵漁をも職業としては妨ないと言ふのは全く此意味である。

然るに此に一つ注意すべきことは出世間の生活よりも世間的的生活の方が信仰としては確に力強きを要するのである。出世間生活なれば枯木死灰、争ふべき財もなく、望むべき名もなく、すべての社會の誘惑より絶縁されてるのである。しかるに世間的な生活ならば富貴、位置、名譽、利益、百般の誘惑物は周圍を圍みつゝあるのである。其間に立ちて信仰を以て打ち立つと云ふことは、餘程力強くあらねばならぬのである。是てこそ宗教なるものか活社會に生きつゝあるものにして、人世に觸るれば觸るだけ、人生を信仰化するのである。

信仰を以て活世界に立つときは必ずしも平和なる生活には限らぬ、寧ろ信仰を以て非信仰的生活と戦ふことになる。信仰なき社會に於て信仰なる生活をなすときは決して社會より理

要義は内心の解脱にありて、必ずしも位置財産あらゆる職業を擲たねばならぬといふことはない。若し適切に言はしめば信仰に入りてこそ、あらゆる職業をして意義あらしむるものである。政治家は自己が政治をなすことは佛陀の御計によりて政治をなすものにして、自己の富貴榮達を爲てない。寧ろ政治夫自身の爲めに政治を爲すのである。實業家が實業を爲すのも單に自己の利慾の爲めにするのではない。若し利慾の爲に爲すならば随分亂暴なことになるであらう。實業も眞の意味に於て實業夫自身の爲に働かねばならぬ。教育も信仰ある人格を修養するが爲である。學問も信仰と調和せる知識を得る爲である。信仰なるものは決して各部の職業を棄つるものでなく、各部の職業の真意義を發揮せしむるものである。政治家の主眼は節操である。其節操なるものは信仰にあらざれば養ふことが出来ぬのである。寧ろ信仰夫自身が節操となるのである。實業家の主眼は確信である。其確信の生じ来る源は信仰である。人格の中心は信仰である。學問を活かしむるものは信仰である。故に信仰は各部夫自身を離れて存在するものでない。適當なる言語を以て言へば、信仰ありて人生が始めて本義に立歸るのである。信仰に入ればとて決して

解さるゝものではない、理解されないときは必ず迫害を來すのである。迫害が來りたるときに信仰の力があらはれるのである。信仰の力があらはれたるとき、非信仰的なる社會が信仰化するに至るのである。此に於て初めて理想的の社會即ち信仰ある人生なるものが實現されるのである。結局佛陀の光明が人生の上に生命となりて示現し給ふのである。即ち既に業に人世は佛陀の慈悲を以て満たされつゝあることを自覺するのである。

一朝夕は、如來上人の御用にて候あひた、冥加の方をふかく存すべきよし折々前々住上人仰せられ候、
 一前々住上人仰せられ候、彌陀をたのめる人は南無阿彌陀佛に身をば、まるめたる事なりと仰せられ候と云々、いよく冥加を存すべきことに候、
 一丹後法眼、蓮照、衣装と一のへられ、前々住上人の御前へ伺向さふらひしとき仰せられ候。衣のろりを、御たゝきありて、南無阿彌陀佛と仰せられ候。又前々住上人は、御堂をたゝかれ、南無阿彌陀佛にもたれたるよし仰せ候らひき。南無阿彌陀佛に身をば丸めたると仰せられ候と符合申候 《蓮如上人御一代問書》

信仰内面の光景

信仰内面の光景は實に言ふべからざる難有き味がある、世界の事々物々皆佛陀の御許ひによりて最も適當に吾人を導きたまふのである、其御導は實に廣大なるもので、とても我々の思議の外である、特に最も不可思議の感に堪へられぬは我々が信仰に入るべき道行である、世人は信仰の事と人世の事と別事の様に思ふて居る、されど人世百般の事件は皆信仰に入るべき経過に過ぎないのである、或は政治、或は經濟、或は學問すべて百般の人世問題の爲に奮闘して、最後に遂に信仰に達するのである、故に信仰に入るまでは各の人が或は政治の爲に、經濟の爲に、乃至學問の爲に奮闘しつゝあると考へて居るのである、されど借いよく最後に達してみれば得たるものは精神上の光明である、故に一たひ信仰の眼よりみれば世間人世の出來事一として信仰の経過ならぬものはなし。

故に未だ信仰に入らざる已前の人生生活なるものは何事をなしつゝあつても眞の意義は來らぬ、たとひ眞理を研究すると稱するも、信仰の名の下に進みても畢竟未だ絶対の光明に

し詩人が見れば詩的形容と見るであらう、若之を生理學者が見るならば幻覺錯覺と見るであらう、されど是等は信仰の外をを評論したるもので、未だ内面の光景を感じたものとは言へぬ、此點に於ては佛教浩瀚の經文は一として此信仰の經驗ならぬものはない、而して此の如く信仰内面の光景は至善至樂のものである、そして信仰の要義は此間に殆んど形容すべからざる大安慰の來ることであつて、しかも偉大なる佛陀の大慈悲に感泣することである、此佛陀の慈悲の味は信仰に入らざる已前に於て宗教上の常套語として反覆したるものなれども、此時初めて其味を知るべきである、そして一たび之を味へば絶対にして一生吞奪る永劫に忘るべからざるものである、實に世の中は到る處佛陀の慈悲の溢れざる所なく、人として佛陀の恵みを受け得ざるものは一人もない。

此に最も注意すべきことは實際上此の如く佛陀を感ぜずして佛陀を口にするものである、是は信仰外面に在りて内面のことを想像假定するもので、決して絶対の光明がない、勿論外面より佛陀を敬慕して之を辿ることは確かに信仰に入るの極めて眞摯なる道程たるに違ない、されど眞實如來攝取の光益にあつかりたるにあらざれば忽ち信仰は消え失せてしまふ

接したとは言へぬ、其代りにはたとひ如何なる事の爲に苦悶するとも又如何程窮厄なる境遇に陥るとも甚しきは固圍に呻吟する人でも皆是信仰に入るの道行である、勿論其人自身に於ては我は信仰問題の爲に苦みつゝありとは自覺せぬのである、夫が信仰の眼よりみれば皆信仰に入るべき道行になつてあるのである、故に信仰内面より人生を眺めるときは人は皆結局信仰に流れ入るべく浴々として集り來るのである、此點より見れば、人は皆如來の光明を蒙れることを自覺せんが爲に、或は悶え或は苦みつゝあるのである。

さて色々人生上の事、最後まで達したるとき恰も後方より光明を以て襲はれたるが如く氣附きてみれば、嗚呼我は決して人世、社會を不平として眺めるてはなかつた、我は既に業に佛陀の光明を以て包まれて居つたのであつた、といふことを自覺するやうになる、既に自覺して四方を眺めて見れば實に光明の世界である、一として其處を得ざるものはないのである、其處は得て書くべからざるものである、古來經文中に書かれたる觀法中の現象及び佛陀示現の事實の如きは皆信仰上の眞境である、信仰の眼には光明にも接すべく空中の華も見へる、音樂も聞へる、香も感ずるに至るのである、若

ものである、しかるに此如來廻向の信念は實に金剛不壞の信心であつて、如何に之を打消さんとするも、如何に之を疑はんとするも打消すことも疑ふことも出來得べからざるものである、猶今一つ注意すべきことは此大信心なるものは決して人が自分で得たるものではない、全く佛陀より賜はりたるものであつて、一分一厘我が得たるものではないと云ふことである。

さてかく信仰内面に入りて人生を眺むるに人生の出來事に於て不可思議を感ずることのみ多し、殊に外界の出來事を觀するに如何様にしても佛陀の導きとしか考へられぬ事柄のみである、宗教上奇蹟不思議と稱せらるゝ事跡を面り見聞すること、出來るのである、されど特に荒唐不稽のことを言ふのが要義ではない、若し信仰の眼より見るならば世上當然として怪まぬことまでも深き意義を見出すやうになるのである、之を要するに人生はことごとく佛陀が然るべく導きて下さるのであると云ふことが恰も掌を見るが如く分るのである、つまり信仰に入れば人生觀世界觀なるものは一變して悉く佛陀を中心とし、信仰を中心としての世界人生となるのである、信仰已後の生活は此佛陀を仰ぎて慕すことである、隨分意

外なる出来事も来ることもある、されど確かに深き意味ありて佛陀の賜たることは明らかである、夫をかく思ひなすのであつたならば中々心の中で承知することが出来ぬ、夫を無理に押しつけても夫はだめてある、抑々人生を擧げて、世界を擧げて佛陀の慈悲に洩るゝことのあるべきではない、苦樂昇沈風か吹くも、雨が降るも皆廣大なる思召のあつてのことである、是が即ち盡十方無碍の光明を以て満たされたる信仰内面の光景である。

「羽村」の音づれ

久々御無音に打過ぎ、不言不語、反て胸中の苦みを免え候、實は小生日々胸中には先生の音容に接するを得て、自ら道交の靈感を享け、恭敬仕候、唯懐る爲善徳自ら之を知らざることを、然りと雖も回顧すれば人を疑ひ遂に自己をも疑ひ始めて先覺の教誨に従はんとするも其苦しみ一方ならずりき、然るに清風地を掃ふ如く、今や殆んど居然堅城に座するの思ひあり、身邊の事状より社會の事柄に至る迄、昔日苦悶の種子たるもの今尙ほ全く無きにあらずれども、從容として不足を感せず反て満足の狀態に在り候次第にて、曾て御教誨を蒙り、釋然自得の境を自覺せしめさせ給ひ候へ共、總めて父母に孝養せんと思ひ及ばざりしころ、佛天の冥啟に感泣して勞働の神聖を認識し、且つ勞し且つ樂しむ、自ら人生の幸福を感じしめられながら、佛縁の奇なる哉、おのづから圓滿なる家庭を生出すに至れる次第にして、大道の内自ら忠孝の備はり至れるを思はずんばならず、予が家庭元來正直を以て第一の法則とす、されど正直の心も境に従て變じ、遂に不知不識、争の具に供せらるゝに至る、是れ一に佛力を疑ひし罪にてや待んべらん、不肖九拜して師の恩誼に酬ゆる所なきも切に「一身を修めて一家齊むる一國治まる」との教訓を初めて感知仕候

明治三十九年一月二十三日夜 石田 佐一 恐惶再拜

感謝

佛陀は吾人の生命也

嗚呼我一心に佛陀に歸命し奉る、人世佛陀在して我をして生命あらしめたまふ、嗚呼我は懺悔し奉る、佛陀在さずば吾人は最終其據を失ふべし、吾人は佛陀の回向によりて吾人黒闇の胸中忽爾安慰を得て無上の確信に達するを得たり、是皆佛陀の與へたまひし所、されど若し其安慰を我物頭に力とするときは忽ちに煩悶來り、其確信を自己の所得として之を攫まむとするとき却て何物をも得る所なし、我我行を願みれば汗脊を濕ほし、我我徳を省るに一も恃むべきものなし、我幸に佛陀無上の寶珠を得たり、人世亦何の利益を望まむ、我期せずして希有開信の人となる、世上亦何の名聞を期せん、唯吾人の最も恃とする所、力とする所、離るべからざる所は佛陀なり、唯佛陀の御名を聞きて言ふべからざる安慰を得、確信自ら來る、吾人は人を恃まず、佛陀を恃とし奉る、吾人は安慰を恃まず佛陀を恃とし奉る、吾人は歡喜を恃まずして佛陀を恃

とし奉る、吾人は世界の何物をも恃とせずして唯々佛の慈愛を以て過去現在未來の特とし奉る、嗚呼佛陀は吾人の生命也、吾人の救済也。

我子の夭折

舊臘二十七日曉、我嬰兒光子は五十八日の短生涯を以て安らかに淨土に往生し奉れり、諺に親に先づの子は佛の御催促也といふ、嗚呼我謹みて佛陀の高恩を感謝し奉る、佛陀慈愛の深廣なる、特に形を現して其面影を示し給ひ、忽爾、寂を示して無常迅速の世態を教へたまへり。回顧せば昨年十月三十一日彼の誕生せし時に予求道九號社説「佛陀は光明也壽命也」の一文を草しつゝありき、乃ち直ちに一篇眼目の文字光を以て名づく、私かに以爲らく是乃ち光明の我を導きたまふなりと、果せる哉、前夜病を示し、翌曉五時紅顔忽ち變じて桃李の粧を失ひ夕に白骨となりて、親しく我等をして涅槃寂靜の境を實驗せしめたり、是に於てか彼は安らかに佛陀の慈懷に迎へられて我等を待ち佛陀の光明益々赫きて永久に我を照したまへり、嗚呼何を如來恩徳の深重なる、彼の生るゝや我却て常に彼を抱かずして走て苦めるの人に佛の慈悲を説き、彼の生

佛の死に因る

を喜ぶと業生をすまのの人に息災延命の佛徳を傳へんことを樂とせりき、彼の生れたるの日又没せしの日共に八王子の女囚に法を説かしめたまへり、嗚呼彼は無意識に我の生命たりき、而して彼忽焉として没するや、我一滴の涙なし、唯如來恩徳の廣大なるを感謝し奉るあるのみ。

されど人間の愛情は無意識に我をして茫然として業務に従ふに懶からしむ、歳未年始共に門庭靜かに賀禮を謝し、聖壇佛燈の下に侍して讀經感謝を事とせり、幸に講話傳道に至りては一回も廢したることなかりしも、雜誌執筆に至りては遂に半月の怠慢を來すに至れり、固より是れ必しも之か爲のみならずと雖、無意識の間たしかに希望を少き、生命を薄うしたるの感に堪へざりき、一日以爲らく嗚呼我如來還相の回向を信じて深重の恩徳を感謝しなから、猶濁世の壽命を恃みて未來の無量壽を仰がす、唯人生示現の光明を慕ひて彼岸無量光明土を欣はず、是真個に如來の恩徳を疎かにし、我子の使命を無益に終らしむるもの、豈慚愧に堪ゆへけんや、嗚呼我は此の如きとより少き人間なる哉、佛陀の恩徳を空しくする徒なる哉、されど佛陀の慈愛は此に止らずして、猶我を見捨て給はずして或は慰め或は警め、感謝の裡我筆を執らしめたま

ふ、此に至りて吾人は此廣大なる佛徳を言ひ顯すの言語を有せざる也、南無阿彌陀佛。

如來の御はからひ

人間は諸のはからひの結晶也、善につけ、惡につけ、必ずはからひを挿む、之が爲めに苦悶あり、空望あり、是皆自己の力あるを恃とするに坐す、是に於てや遂に如來のはからひを見る能はず、而して人間のはからひを捨てたるの時初めて佛の御はからひを見出したるの時也、唯如來の御はからひを確信したる時人世到る處平和あり、希望あり、而して信仰已後猶凡夫の常としてはからふこと多し、之が爲めに猶煩悶を來すとあり、されど佛天の御はからひに任せ奉りたる時實に光風霽月如來の光明は三千大千世界を隈なく照耀したまふ、於戲。

求哀懺悔

我至心に佛陀の膝下に身を投じ懺悔し奉る、嗚呼何ぞ我罪業の極なき、我佛陀無上の恩寵を蒙りて廣大難思の信を賜はると雖、我一身を顧みれば、ます、煩惱熾盛の衆生たるを見出すのみ、嗚呼我法を説くや確に佛陀の膝下に咫尺して、

甚深の重愛を蒙ると雖、忽にして佛陀を去ること千萬里、何の面目ありて我法を聽ける人に對せん、我口に説くところ、たしかに如來の御聲也、我行ふ所悉く如來の光明を蔽ひ奉る、

我暖かに眠り、飽まで食ふ、嗚呼五劫思惟、兆載永劫の修行の恩徳に對して如何し奉るべき、雪を茵とし、石を枕としたまひし諸主知識の恩徳に對して何の言を發せん、粉骨摧身の語之を反覆すること常に未だ一寸の身を捨て一分の己を殺したることなし、佛陀宿世の修行の大なる尺寸の地も捨身の所にあらざるなし、我未だ尺寸の捨身なしたることなし、人を化せんと企て、人を化する能はず、他を導かんとして導くあたはず、實に小慈小悲もなき身也、無慚無愧のこの身に、てまことの心は更になし、是非しらぬ、邪正も分かぬ此身也、小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむ也、如何我何の所に此身を置かん、如何我何れに向て此罪を懺悔せん、幸に彌陀廻向の法ありて功德十方に滿ち給ひ、幸に若し如來の願船在らずば、我がかてか苦海を渡るべき、冀くば我佛慧功徳を讚嘆して、十方有縁の同行と共に喜ばんのみ、我力として一寸一分の捨身をなすべからざるも、如來の恩徳の身に餘るを感ぜば一代浮雲の名利何の惜むところかあるべき、嗚呼是れ懺悔歎、感謝歎、懺悔も感謝も皆佛陀の賜にあらざるなし、我至心に稽首頂禮感泣し奉る。

講 話

聖尊の重愛

(求道學會講話)

然るに常没の凡愚、流轉の群生、無上妙果の成じがたきにはあらず、眞實の信樂まことに得ること難し、何を以ての故に、いまし如來の加威力に由るが故に、博く大悲廣惠の力に因るが故に、偶々行信を獲ば是心顛倒せず、是心虛偽ならず是を以て極惡深重の衆生、大慶喜心を待、諸の聖尊の重愛を獲るなり——親鸞聖人信巻、

聖尊の重愛と云へる言は實に何とも云ふて見ることの出来ぬ程難有き言であります、もと此言は大經の異譯無量壽如來にある言であります、親鸞聖人の信仰の活眼を以て經文を讀破せらるゝ時何とも形容の出来ぬ味のある言を發見せらるゝこと、恰も珠を掘り出さるゝ如き感があります、殊に無量壽如來會にありては信仰上非常の味のある言が多い様です、例せば一念の淨信と云へる言、歡喜愛樂の文字、又大威徳者、廣大勝解者等皆絶對の境界を云ひ現はされたる文字であります、而して題下に引用し奉りたる信卷開卷の處に述べられたる文句は一に是等の文字を集め而も我々が心中に佛陀廻向の大信心を生じ來りたる様子を示されてあります。

全体、親鸞聖人が如來廻向の信心と云へることを根本として御示し下さるは實に、味深きこととあります、近時信仰上の問題が頗る勃興して大安心に住せらるゝ人が多いこととあります、是等の大安心なるものは決して自己の力によりて開き來りたるものではない、皆佛陀の偉大なる力の加はりて遂に其境界まで導かれたのである、人が一たび定心の地位に入れば其安心が何處より來りたと云ふことは措いて問はず、唯我こそ安心を得たりと云ふことを主張すれどこれは頗る警むべきこととて、若し自己の力でこれを開き來つたと思ふならば大なる誤りである、此際最も喜ぶべきことは此くの如き絶對の大安安心は佛陀の力より來るものにして又かくの如き至大なる恩寵を蒙ることは所謂國に一人か郡に一人と云へる仕合せなるものと喜ばねばならぬ、而して此信卷の文句は親鸞聖人自身が信心を得られたる喜びを思ひ切り云ひ表はされたものであります、この感じは親鸞聖人には余程深かつたものと見えます。

既に教行信證の總序にも「憶弘誓の強縁は多生にも値ひ難く眞實の淨信は億劫にも獲難し、偶々行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」と云ひ又信卷の別序にも「夫れ惟みれば信樂を獲得することは如來選擇の願心より發起し、眞正を開闢することは大聖矜哀の善巧より顯彰せり」又後序にも「慶はしき哉、心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流す、深く如來の矜哀を知りて誠に師教の恩厚を仰ぐ、慶喜彌々至り至孝彌々重し」とあります、孰れもこれ聖人が絶對安心の信仰を得られたには全く如來の御力によりて我が身に授けられたるものなりと

云へる無上の歡喜であります、そして只今此に擧げたる信卷
始めの文句は最も適切にこの感じが表されてあります、そこ
で文句を逐うて聖人の御喜びを味はせて頂きたいと思ひま
す。

常没の凡愚、流轉の群生、無上妙果の成し難きにはあらず、
眞實の信樂まことに得ること難し、宗教は人類何人にも實驗
せらるべきもので殊に佛陀の大慈大悲は一切衆生に普く破る
のである、涅槃經に「一切の衆生當に大慈大悲を得べきが故
に一切衆生悉有佛性と云ふなり」と云へるはこの味でありま
す、雷に一切衆生に普く破るのみならず、罪深きもの惱み多
きものに向つて慈悲を垂れ給ふこと殊に多いのである、涅槃
經に「例へば七子あらむに母の愛平等ならざるにあらざれど
も病める子に於て心偏に重きが如く如來も亦然り諸の衆生に
於て平等ならざるにあらざれども而も罪あるものに於て心即
ち偏に重し、此の如く佛陀は絶對の慈悲を以て臨み給ふの
である、如何なる常没の凡愚、流轉の群生と雖も無上涅槃の
妙果を得るは決して六ヶしきことではないのである、然るに
この大なる慈悲を染々と感じて絶對無碍の信仰に入ると云ふ
ことは實に希有のことである、こゝが實に云ふに云はれぬ有
難き味のある處で佛陀の慈悲は永久の昔より我等に向て開
かれてあるのである、さり乍ら眞實の信仰を味つてこの佛の
大慈大悲は我一人が爲なりと信知することは實に難きことと
ある、この一段に至りては何とも云ひ難き六ヶ敷ことである、
既に大經にも難中之難無過斯難と云うてあるもこの點であ
る、此に至りては決して人間業の及ぶ處でない、親鸞は父母

詳しいことは其人自身が告白せられることとありませう
が、今其要領を申しますれば病氣療養の爲に色々苦勞せられ
て或は神頼みをするとか、或は催眠術の治療を受けるとか色
々と心配をし種々に計らひばかりをして居られましたがつい
催眠術の雑誌の「精神」の中に聖人の和讃が四首引いてある
のを一瞥せられるなり此の如き不可思議なる信仰に入られた
のである、其四首の和讃と云ふのは

無明長夜の燈炬なり
智眼くらしとかなしむな
生死大海の船筏なり
罪障ももしとかけかざれ
願力無窮にましませは
罪業深重ももからず
佛智無邊にましませは
散亂放逸もすてられず
盡十方の無碍光は
無明の闇をてらしつゝ
一念歡喜するひとを
かならず滅度にいたらしむ
罪障功德の體となる
こほりとみづのどとくにて
こほりもほさにみづれほし
さはりれほさに徳ほし

この人は眞最初に無明長夜の燈炬なり智眼くらしとかなし
むなと一讀するなり實に有難いと感ぜられた、誰も平日

孝養の爲に念佛一遍にても申したること候はず、一聲の念佛
も自分で勵んで稱へる念佛ではない、我等が佛陀の御慈悲を
讚嘆する時、諸君は何時の間にやらあゝ有難いと感ぜらるゝ
のは決して説くものゝ力でもなければ喜ぶ人の力でもない、
如來の御催しに預りて念佛申し候ふ人を我が弟子と申すこと
は極めたる荒涼のことなり、共に佛陀の御慈悲を喜ぶ同行同
信の人でこそあれ、何ぞ人間の小さな計らひを以てどうか
うのとすることの出來るものではない、況むや其の御慈悲を
感ずる人は毛頭自分の力などの加たるべき筈がない、全く如
來の威神力を加へ給ふにあらずんばとてもこの恵みに値ふこ
とは出來ぬのである、又大慈大悲の廣大の智慧力にあらずん
ば決して眼の開かるべき時はない、そこで次に何を以ての故
に、いまし如來の加威力に由るが故に、博く大悲廣惠の力に
由るが故にといへる大斷案を下されたのである。

這般の消息はどうしても信仰の内の事實であつて實驗の御
力である、去る十五日恰も死んだ小供の三七日を營み又學舎
に於ける報恩講を營まむと思ひまして丁度動行を始めやうと
します時に一人の婦人があはたしく來訪されました、其人
は家に入るや否や、懷中から「精神」と云ふ雑誌を出し「私は
この中にある四首の和讃を拜見するや否や忽ち如來の御恩が
身に染み渡りて嬉しうて勿体なうて夜も寝られず、身のれき
處がない」と云うて疊の上に身を投じ悲鳴して感涙に咽ばれ
ました、私も非常に驚き且つ思ふには今日は丁度かくの如き
營みをなした、ある日故に特にかくの如き不思議なる御縁に
あはせて下さつたこと、深く感じて猶ほ詳しく尋ねました、

讀み慣れて居る故とも思はずに居るが無明長夜の燈炬なり
とは永々の間徒らに煩悶心配して人世に一點の光を見出さ
る人に向つての直接の光明である、智眼くらしとかなしむな、
實に大慈大悲の佛陀が我が暗黒界に迷ひつゝあるを矜哀し給
ふ御聲である、生死大海の船筏なり、罪障ももしとかけかざ
れ、これ實に我々人世の上に佛陀の直接下し給ふ事實である、
先日私の小供が死にまして御通夜の節棺前に於て何げなく

大願の船に乗じてや
生死の海にうかみつゝ
有情をよばうてのせ給ふ

と誦したる時は實に今まで嘗て氣付かなんだ如來の御慈悲
を喜ばせて貰ひました、實にこれ生死大海の船筏なり、罪障
重しと嘆かざれと云ふ佛陀の呼び聲であります、況んや進み
て願力無窮にましませは罪業深重ももからずとは如何に力
強き願力であるか、我々は罪深く計らひ多く如何にするも持
ち堪へられない罪業深重のものである、色々計らへば計らふ
程苦しみを増し企つれば企つる程沈淪する運命を持つて居
る、然るに佛陀の願力たるや人間の計らひ以上の計らひであ
る、佛陀の慈悲は人間の惱み以上である、此無窮なる大威神
力を加へ給ふに於ては我等の企ては徒勞であり、我々の計ら
ひは無効に歸す、これ即ち如來の加威力である、佛智無邊
にましませは散亂放逸もすてられず、如來の智慧海は深廣に
して涯底なし、如來難思の大智惠海に向つて凡夫の我等卵の
毛の先程も計らひを挿むべきではない、これ即ち大悲廣惠の

力である、かくのごとき如來の加威力大悲廣慧を感じて忽ち信仰に入られたのである、よつて信仰を自身は、如來直接の御力によつて其人の上に、下つたのである、私はかくのごとき日柄にかゝのごとき人の來訪をうけて、これこそ實に只事ならずともひ、深くよろこばせて貰ひました。

偶々、淨信を獲ば是心顛倒せず、是心虛偽ならず、是實に信仰實際の眞境界であります、實に人の信仰を得るや、期せずして、偶然人にあへるがごときものである、大經には、斯の光に遇ふとあり、法華經には、かくのごとき妙寶求めずしてのづから來るとあります、實にこの清淨の信心うるは、少しも自分の計らひのまじはらざるどころである、今偶々淨信を獲るといはれたは、眞にその境界である、親鸞聖人の此點について、深く感ぜられたるものとみえて、前におげた總序の文にも、偶々淨信を獲は、遠く宿縁をよるべといはれた、實にわれ何等の幸かはからざるも、この大なる信心をたまはれる、實にこれ曠劫多生の因縁、宿世より導びきたまひし佛縁の奥深きことをよろこばずにはなれぬ。

久遠劫よりこの世まで

あはれみましますしには

佛智不思議につけしめて

善惡淨穢もなかりけり

永遠悠久の昔より、我身を引接したまひし佛のめぐみのたのもしき、一度佛力によつて、かくのごとき心が起つたる以上、この心顛倒せず、この心虚偽ならず、不思議なることに、一度佛の光にあひたてまつり、如來の御慈悲を感じたる

全體この人が尋ねて來られた主意は此の天に踊り地に躍り包み切れぬ程の身に溢る、歡喜の情を披瀝する爲であつた、それ許りてはなく、餘り喜びが甚だしく恰も一週間一と目も眠ることが出來ぬとのことである、實に大慶喜心の極である、夜寢て居て御開山の御苦勞を思へばちつとして居られず、蒲團の上に横たはつて居るに耐えられぬものであつた、又自分の知り合の人々がまた此の味を知らぬかと思へば如何にしても傳へたいと云ふ心が起りて却つて心が苦しいこのことであつた、私は必らず佛の宜しき様の御計らひあるとなれば入らざる自分の計らひを以て苦しむとは無用であると云ふて、それから此婦人は佛事や説教を聽聞して喜んで歸られた、序乍ら信仰上最も味ある經驗として其後の次第を話すに遂に黙しては居られず、兄なる人の家へ行つて如來の御恩を喜ばれた處、兄なる人は汝がかく喜ぶことを得るも畢竟嫁したる家の恩なれば決して忘れてはならぬと云はれしに、妹の人は何氣なく皆これ如來の御恩であると思ひて答へられたので、兄なる人が非常に立腹して自分の言葉に逆らつたと云うて叱られた、そこで妹の人も我れはどうかして此廣大の御恩を喜んで貰ひたいと思つて來た、一念不足の心を生ぜられた處、それ程の喜びが忽ち消えて如何にしても喜べぬ様になつた、そこで如何にしても前の様に喜びたいと努めても努めれば努める程無効であつた、そこで否氣附いて喜べやうが喜ばれまいが皆佛に任したのであつたと思ふなり樂々となつて却つて其夜より安眠せられたとのことである、實に歎異鈔第九章の喜ばれぬにつけてもいよく大慈大願を頼もしく思ふ味

The sinner thinks the sin is good,
So long as it hath ripened not;
But when the sin hath ripened, then,
The sinner sees that it was sin!

The good think goodness is but sin,
So long as it hath ripened not;
But when the good has ripened, then,
The good man sees that it was good!

ひである、罪障功徳の體となる、氷と水の如くにて、氷多きに氷多し、障り多きに徳多し、世の中に困難が多くなり我身の罪惡が深きを知るにつけて益々信心の徳が現はれて來ます。
親鸞聖人が現生十種の益を授け給ひ、或は冥衆護持の益と云ひ、或は諸佛護會の益と云ひ、或は諸佛稱讚の益と云ひ、冥々の間に諸佛菩薩諸天善神が我等信心の行者を愛し給ひて其力強きこと云ふ可らず、其慈悲の深きこと力強きこと譬へ様はない、百重千重圍繞して、喜ひ護り給ふなり、我等は光明に包まれ南無阿彌陀佛に身をまろめられたるものであります、これ聖尊の重愛を得たる實境であります。

ものは、如何なる場合にあつても、この信仰は、變化することなく、動搖することはない、こればかりは事實である、罪業もとりかたぢなし、妄想顛倒のなせるなり、心性もとりきよけれど、この世はまことの人の老なき、實にわれ、自身の本性は妄想、顛倒、虚假不實にして一つも取るべきところはない、然るに不思議にも、この妄想顛倒の胸中にやどれる信心は、決して彼等に壓倒されるものでない、われら信仰以後の生活に於ても、われわれ凡夫の本性は常に其威を逞ふしてある、實に慚愧すべきことである、されどこの間に於て信仰の威力は、慚かに我々の心を壓倒して正しき方へ導びいて下さる、もしこの指導なかりせばわれらはいかなるところまで陥るかもわからぬ、實にこれ金剛不壞の信心といへる味である。
是を以て極惡深重の衆生、大慶喜心を得、諸の聖尊の重愛を獲るなり、實にわれらは、極惡深重の衆生である、日本に於て敬虔なる、念佛修行の根本たる源信和尙、口常に念佛をたゞず、或は文に或は書に淨土の莊嚴、佛陀の相好に親接せられながら、なほ叫んでのたまはく、極重惡人無他方便、唯稱彌陀得生極樂と、自ら余がごとき頑魯のものといはる、況んやわれら、晝夜十二時、心口意業の三業常に惡にのみ陥り煩悶苦惱に堪へざるもの、不思議なるかな、大慶喜心を得るとは、かの十五日に尋ね來られし婦人は、盡十方の無碍光は、無明の闇をてらしつゝ、一念歡喜する人を、かならず滅度にいたらしむ」といふ和讃をみて、この一念歡喜がうれしいといふて身のあざどころもなくよろこばれた。

聖傳

ジャータカ釋尊傳

一 佛誕生

佛陀の宣布と呼ばれる、事の起りしは菩薩歡喜の都におわせし時なりき。此世に於て三つの宣布ありき、そは次のごとし。彼等十萬年の後に於て、新らしき時代の起らんことを悟りし時、ロキヤビニユーノとよべる天使等、彼等の髪を振りみだし泣顔して、手もて涙を拭ひつゝ、紅の衣をまとひ、とりみだしたる姿して人々の中をさまよひていひけるは、

「友よ、今より十萬年の後に於て新らしき時代來るべし、世界の構造は壞れ、渺茫たる大洋は干乾し、山々の王たるシネラと共に、此天地も燃えて滅し、全世界はみえざる天使の國にやすぎゆかん、故にね、友よ、慈悲を行なひ、親切をなせ、同情と平和もて生活せよ、汝等の母をやしなひ、汝等の父を支へ、汝が宗族に於ける長者を敬すべし」と、これを新代の宣布とよぶ。次に彼等千年の後に於て全知の佛陀、世に出興し給はんと悟りし時、彼等は此處かしこを經めぐりて布令をなし、いひけるは、「友よ、今より千年の後、主は世に出興したまはん」とこれを佛陀の宣布といふ。

又天使等、百年以後に於て、世を一統したまはん主のいてまさんことを悟りし時、各地を巡りて布達をなしぬ。曰ひけるは、「友よ、今より百年の後に於て、世をすべたまふ主出興したまはん」とこれを統一主の宣布とよぶ。

かれら、かく佛陀の出興を布達するをきくや大千世界のもろくの神、一所にのどひ、現今おわす人のいづれが佛陀たるべきかをたしかめたまひぬ。やがて彼等は菩薩の壽まさにつきんとする最初の徴あらはるるや、各世界の天使長と共に歡喜の都にまします未來の佛陀のみ元に到り、彼君に説きぬ。あはれ、みめぐみ深き君よ、君十善を行じ給ふや、君はツカメーラ或はブラマ等の如き天使長又は地上の大王等に榮光あれかしとの願よりしたまはざりき、君は専ら衆生救済の爲に悟道に達せんとの希望にてはげみたまひしなり、今そが時は來りぬ、あはれ、大悲尊、君が佛陀となり給ふべき時を來れる、願はくば世に降り佛陀となり給はんことを」と。

されど大聖は恰かも神の祈願をゆるし給はざるごとく、默然として五つの主要なる點に於て御降世の時をつぶさに鑒みたまひぬ、即ち降りまします大陸と國と、宗族と、母及そが壽命となりき。君はまづ時を思惟したまひぬ、今、時は來りしや否や、——人の存在の年間十萬才以上なるときは出興の時に非ざるべし、如何となれば、かゝる時代に於て、人は生れ、衰へ、遂には死するてふ事を悟り得れば、佛陀の福音は、如何にとくとも了解しがたかるべし、又佛陀、諸行は無常なり世は悲しみのみ、各自はすべて虚なり妄なりとのたまふとも、人皆耳をかたむけずしていはん、かれの語る處は何ぞやと、

かく眞理を理解し能はずしては福音も人を救済に導びくことあたはるざべしと。

又人の存世する年間百歳ならん時も、正しき時にあらざるべし、故は、其時に於て罪は人中に熾盛なり、罪人をいかに警戒すとも、最早や教訓の餘地なくして、水に流せる板のごとく速かに消えさらん。

されど十萬年以下百年以上ならんにはいとふさわしき時たるべし。其時、人壽は百才なりき、故に大聖は君の降世の時來れることを觀知したまひぬ。

次に數多の小島にかこまれたる、四大陸を思惟したまひ、常に諸佛のゑらびたまふジャムトバイバ大陸をゑらみ給へり。

次に國を思惟したまへり。ジャムトバイバは廣さ一萬リグの大陸なり。何れの國に佛陀は示現せんか。君は中央國に定め、かつ其國のカピラバスツとよべる都に生れんと決したまへり。

次に、階級を思惟したまへり。佛陀はバイシヤにもスドラにも生れじ、カヅプラマナ或はシャートリヤの何れにてもすぐれたる、名聲ある家柄にうまれん、今シャトリヤまさされり、われはその家柄にうまれん、そがスドホーダナといへる帝王は我父たるべし。

次に母を定めたまへり。佛陀の母は愛欲におぼれず、飲酒にふけらず、過去十萬年に十善を行じ五戒をやぶらざる婦女たるべし、そはマハーマヤーとよびて我母とならん。なほすゝみて母の壽命をはかりたまひしになほ十月七日生

きながらへんことを前知したまへり。

かく五つの要點を思惟し終りて後、始めて神々の請願をゆるし、彼等を喜こばしめ、満足せしめ給へり。曰はく、善哉神々よ、われのために、佛陀たるべき時はきたりぬ。いざ汝等去るべしとて、かれらを解散せしめたまひ、大聖は觀喜の都の諸天使にかこまれたつゝ、喜の園に入りませり。

抑も各の天使の園に於て、かくのごとき一の喜の園とよぶありて、天使等はかれらの中誰れにても、宿善によりて得たる樂境より離れんとするや、かしこに於て、なごりををしむを常とせり。彼等いひけるは、君よ、君降りまさば天福ある家に生ずべしと。かくして菩薩は君の御徳を讚美せる天使等にかこまれたつゝ、そこを遊戯したまひし後、別れをつけ貴女マハーマヤーの胎宮に入りたまひぬ。

これを詳しく、説かんにかく傳へられたり。カピラバスツの都に於て中夏の宴開かれ、人民は其饗應にあづかりぬ。

マハーマヤーは満月の七日前より宴に加はり給ひたれど花輪や香物もてかざられたる金剛石の如く、酩酊、狂亂をさけ給ひて、清く美しかりき。

七日目に后は疾く起き、香ひある水に浴し、大施物をなすべく、四十萬金を人々に施與したまひぬ。いと麗はしき御裝束にて后は清き食を喫し、八戒を持せんことをちかひ給ひ、華美なる室に入り、寢臺に横たはりて、ねむりたまひぬ。

御夢に世の保護者たる四人の天使、寢臺と共に后を捧げ持ち、ヒマライヤ山に至り、廣さ六十ロシナーチスのクリムン

ン平原なる、高さ七リ、グ斗の娑羅双樹の下に置き、彼等は
恭しく傍に立ちたり。

かれらの女王等は、其時近傍に進みより、貴女をアノタツ
タ湖にいざなひ、沐浴せしめて人垢をさよめ、天衣を着せし
め、香物を塗り、天華もて装ひぬ。

がしこよりほど遠からぬ處にしるかねの小山あり、そが頂
に黄金の舎あり、その内に、かれらは天の寢臺を置き東方を
むけて后を臥せしめぬ。

其時、未來の佛陀は莊嚴なる白象となり、程近きかねの
山をさまよひたまひしが、やがてしろがねの小山をのぼりさ
て北方より貴女にちかづきぬ。かの銀の如く美しく白き鼻に、
白蓮華をたもち、遙々と響く大音聲を出しつゝ、黄金の寮に入
りたまひ、三度かの后を禮して、しづかに右脇より母体に入
りたまふとみえたり。

かく菩薩は中夏の宴の終りに受胎されたまひぬ。后、翌朝
御眠よりめさめたまひ、夢の次第を夫君につげたまへり、
夫君大王はあやしみて、六十四人の名高きプラマンをめし
綠葉及びガルバーツアの華もて坐をしつらひ、精製せる乳酪
と密を混じたるミルクライスを金銀の桶に入れて、金銀の鉢
もて掩ひたるを、彼等にあたへ、更に新衣と牡牛皮を分ちて、
彼等をよろこばしめたまへり、王はなほ、彼等各自の願を満足
せしめてのち、后の夢をかたり、占なはしめ給ひぬ。

プラトッ答へて曰ひけるは、案づる勿れ、王よ、后は妊娠
したまひなり、御子は男子にして王は息子を得たまひしなり、
かの君、もし王位をつぎたまはば、全世界の王たるべし、も

し出家したまはば、まさに佛陀となりて、此世より暗愚と罪
の雲霧を散ずべしと。

そも、未來の佛陀の母体に入りたまふや、三千大千世界の
萬物悉く六種に震動しぬ、三十二の奇瑞あらはれ、無量の光
明焔灼として輝きぬ。このみさかえを見奉らんとまぢのぞみ
しにや、盲者忽ちに明を得たり、聾者は音をき、啞者は談
り使者は延び、跛者はあゆみ、總ての囚人はいましめの繩や
鐵鎖とけて自由の身となりぬ、地獄の炎火一時に滅し餓鬼も
飲食するを得たり、猛獸はあそれられずなりぬ、病めるもの
すべて癒え、うらみも憎しみもいつしかさえて、人々親しげ
にかたり、馬嘶き象なきぬ、もろくの樂器はふれざるに音
を發し、瓔珞其他の裝飾も亦自然に鳴りぬ。全天明らかに、
冷風靜かに起り、雨季ならざるに雨を下し、水は諸所に湧き、
鳥は青空高く舞ひ、川は氾濫せず、大洋の水は新らしく清ら
かに、地上は何處も雑色の蓮華にてあはれぬ。もろくの
花は水陸をえらはず開き、幹も枝も小枝もみなそれ／＼にか
ざられぬ。陸地の木蓮華は岩すら貫ぬきて七總に咲き、空中
の蓮華は、そらより下りぬ。あなうるはしきかな、大千世界
は廻轉し、花束のごとく一つに集まりて、花環の塊の如く又
花敷ける聖壇のごとく、香氣馥郁としてめさむるばかり、恰
も一つのくみあはせたる大花冠の如くなりき。

未來の佛陀御降下の時より、劍を持ちたる四天使、菩薩并
に母体を守護し諸の害を防かん爲に、周圍に立ちたり。
思に於ていと清く、こよなき高さ使命とほまれを得たま
へる后にしあれば、常にたのしくして、ものうきことなかり

さ。

后はあたかも透明なる玉を貫ぬける糸の、玉を透きて、明
らかに見ゆるごとく、胎中の聖兒を見るを得たまへり。され
ど未來の佛陀のやどりまします胎宮は、聖社のごとく、他の
入るをゆるさず、聖兒御一人のものなれば、后は御降誕後七
日經てうせたまひ、歡喜の都に生じたまひしといふ。

さても普通の婦女ならんには、十ヶ月前後或は坐し、或は
臥して、分娩すれど、菩薩の母は立ちて御産あらせられぬ、
こは佛陀の母の特にことなりたまふ所なり。

女后マハーマヤはかく、満十ヶ月聖兒を胎宮にやしなひ
たまひし間は、恰かも器に油を満てたるごとく穩やかにまし
ましき。

或時、后は、生家に行かんとおぼしたちたまひければ帝王
にこひたまはく。

「王よ、妾はヘバタに行かんことをこひ奉る、妾が民の都へ
行かんことをと、王快くゆるしたまひ、カピラバステツより、
ヘバタに至るの道を平坦ならしめ、プレーンテツといへる木
もて作れる綠門や、水瓶其他國旗等にて飾り、數多の侍者に
かゝせたる、こがねの輿に后を坐せしめ、多くの供者にて送
りぬ。

今兩市の中間に、兩市民の所有せる娑羅樹園あり、ランビ
ニの園と名づく。樹は地上より頂きの小枝まで果實と花もて
美しく、其間には雑色の蜂、蜜をあつめ、もろくの鳥群快
げに美音を弄し、全園恰かも紅葉せる葛羅の林のごとく、又
大王の飾れる宴席のごとくなりき。

后こをみたまひ、暫し園に遊はんと切にのぞまれければや
がて入り給ひぬ。林の細路たどりつゝ、高さ娑羅樹の下に來た
まひし時、后何心なくそが枝に觸れんとしたまひしに、枝あ
のづから下りて恰かも蒸氣もて熱したる蘆の如くたわみ、貴
女の御手の届くまで近づきければ玉手さしのべて枝をとらへ
たまひしに、御惱み起りぬ。

人々あどろきて周圍に慕をひきまわして去りぬ。后は枝を
捕へ、立ちつゝ、御安産あらせらるゝ折しもあれ、心清淨なる
マハープラマの天使等、黄金の羅網もて未來の佛陀をうけた
てまつり、后の御前におき、いひけるは、

「よろこひたまへ、后よ、后は偉大なる男兒を得たまひしよ
と。菩薩の生れ給ふや、他の生物の如く、不淨にそみたまは
ずして、恰も講師の壇を下るごとく、又人の階を降る如く、
眞直に出てたまひ、御手足をさし出し、何の汚もなく、清淨
に麗はしく輝きたまふ事、ベナレスの美しきマスリンの上に
おける、寶玉の如くなりき。されど、なほ、母子の榮光のた
めに、菩薩及母君を快からしめんとて、天は甘露の雨をそ
ぎぬ。

黄金の羅網もて、聖兒をうけし天使の手より四人の王は、
貴人にふさはしき羚羊の皮の膚にやわらかなるをもて、菩薩
をうけ、又かれらの手より人々は麗はしき衣の上にうけぬ。
彼等の手よりはなれ給ふや、地上にたちたまひ、遙かに東方
を眺めたまひしに、大千世界は一つの廣々たる土地のごとく
みえたり。天使も人も馨高き花輪をさくけていひぬ、
「お、大聖、君をおきて君にひとしきものはあらじ、たれか、

より貴き」と、東西南北四維上下の十方を見終りて、大聖は自身のごとき人なきを見たまひ、又東方に向つて七歩あゆみて宣はく、こは最上の方なりと。君の歩したまふや、プラマ、ヌヤーマの天使等は君の上に眞白の傘をかざし、他の人々は羽扇をもてこれに従ひ、神々は、帝室の章を捧げぬ。大聖又七歩にて止り氣高き勝利の音聲もて、

「われは世界の主長なり」とのたまへり(つゞく)

皆遵普賢大士之徳。 具諸菩薩無量行願。
安住一切功德之法。 遊步十方行權方便。
入佛法藏究竟彼岸。 於無量世界現成等覺。
處兜率天弘宣正法。 捨彼天宮降神母胎。
從右脇生現行七步。 光明顯曜普照十方。
無量佛土六種震動。 舉聲自稱吾當於世。
爲無上尊釋梵奉侍天人歸仰。(無量壽經)

心地よげに笑つたのを何う云ふ譯か今も尙ほ目に見えるやうに覺えて居ります。同じ頃尋常小學の四年で、教師が人間は何の爲めに生れて來たのかと云ふ問ひを生徒に課せられた、銘々區々の答をしましたが其時私は、「苦勞する爲めに」とこれも雜作なく答へて、教師から「苦勞をしてその後樂をする爲めに」と訂正されたのも覺えて居ます。訂正された私は鳥渡不快に思つた。そして何うも何ちが正しいとも判らなかつたが、何故あんな答をしたらうかと後で恥かしく思つたことでした。此の事は永い間忘れて居つたのでありますが、今筆を執つて此の告白を書かうとすると、過去の出來事、爲し來つた事、皆難有い御方便であつたと云ふ感じがむら／＼と起つて今更のやうに感謝に堪へず、あれも、これも御導きと悟つて見ると此の様なき細なことで今更の私にとつては無上には有り難く感ぜらるゝのです。今日の私の幸福は、今日初めて得たのでなくして、實は實は昔より養はれて來たのであつた、泣いたこともある、怒んだこともある、怒つたこともあるが、泣かせ、怒ませ、怒らせ給ふたのは、此のお慈悲を知らせて下さらうための全くは方便に過ぎなかつたのだと思へば、愧かしくもある、勿躰なくもある、が、たゞ難有い、たゞ嬉しいと云ふより外に言葉はないのであります。

小學より中學に進むに従つて、宗教と云ふものは無智な老翁老婆を欺す方便に過ぎぬのだと云ふやゝな考が世間の普通であつた所から、根底のなき自分の信仰は猶ほ沙の上の藁一筋ほどの力もなく世の荒浪にさらはれて了つたのです。序に申しますが、信仰を形つくる所の知識や實驗や種々様々、各人各箇に相異なつて居るものでありませうけれども、信仰そのものに至つては、眞の信仰ならば皆一つだと申してよからうかと思ひます。十歳前後の頃に於ける私の信仰

告白

半生の追憶、信仰の告白

島中雄三

不思議の御縁によつて、此のたび圖らずも佛陀大悲の慈光を身にしみ／＼と親しく味はせて頂きましたことを、此の告白の冒頭に於て先づ感謝に堪へぬのであります。元來自分は虚弱な生れて、十五六の頃に重病を患ひてから、迎も長生は覺束ないと人も云へば自らもさう思はれてならなかつたのであります。神經が極く過敏な方て感情がつよく、控へ目がちの而してまた高慢で、容易に人に頭を下げるのは厭でそれがために身上の人から嫌はれるやうな傾がありました。家庭は眞宗の家庭で、親父は可なり熱心な信者であり、外戚も僧家である所から、子供の時分も能く宗教の話を陰で聞いたこととあります。七八歳の頃から佛壇に手を合せることを教へられた習慣は、子供心の何とも辨へずになつたが、如來さまと云へば難有い方とばかり頭にしみ込んで居つたのが、十歳位の時でしたらう、亡くなつた姉(三つ年上の)が、自分達兄弟姉妹の此様に仕合せに暮らせるのは何故であらうと私に問うたのです、其時の私は殆んど無意識に、極りきつたやうに、雜作もなく「それや如來さまの御陰サ」と答へて、姉が

も、實は信仰と名づくべきほどのものではなかつたが其安心状態は今もまての變りはないやうであります。けれどもその信仰には何等の根據となる知識も實験もなかつたが爲めに、やがて消えはてし、それでも別段の苦悶もなく日々送つたのであります。が、二十歳の春から夏にかけて、二三月の間に肉身のもの四人前後して死ぬると云ふ悲しい目に遇つて、此の時ばかりは染々人生の無常を親じたのであります。それまでは死別の悲みを身に味うたこともなく、私かに胸に希望を抱いて送つて居つたものが、俄然としてそれですから實に應接に追もなく、呆然として何が何やら分らぬ位でありました。今にも自分が死んで了ひさうな心持になつて、全く自暴自棄に陥つた極は、酒色に辭を紛らさうとしたけれども却て徒らに苦悶を増すばかり、後年、此の時を追想すると例も慄然として恐れるのであります。今日まで人にも語らずに居つた耻かしく、淺ましき行もありましたが、此れは却て紙上を汚す恐れもありませんから茲には詳しく述べませぬ。但だ、全く死んだやうな思ひで、息の通つて居るのが心苦しい位の幾月かを經て東京に上り、私立の法律學校に氣を取り直して學んだのであります。が、元來愛憎な實で、時に激しては、狂者に近い舉動もしかれないといふ厄介な人間でありましたから、學問については比較的趣味を以て居つたに拘らず、何の爲めに學問をするかといふ疑問が常に胸中に在來して居つたのであります。且つ、自分の缺點を矯めることに心を砕いて、倫理哲學に關する書物、精神の修養に資すべき書物も涉獵つて見たのですが、此の時分から暫く忘るゝともなく忘れて居つた人生の無常と云ふ觀念、同時に罪に對するの悔恨が盛になつて來たが、それも努めて忘るゝやう／＼との方針をとつて自らを欺き通したのであります。その忘れる方針としては、自分の悪いことは少しも考へないやうにして唯他人の缺點、他人の罪惡を探しては詰らない奴だ、酷い奴だ、と云ふ工合に見るのである。それが爲めに人を信するの念は頗る薄くなつて、自分ばかり善い人間であるやうに思はれた、幸に先輩や友人も買ひ被つて居るらしい、そこで親切めかして自分の利を圖るのが最も善い方策であると感して居つた。これが私の最も不眞面な時代であつたのです。

先輩友人の間に多少信用せられて居るのを幸に、道徳を修め品行を正して、過去の罪惡や破廉恥やを永久に掩うて仕舞はねばならぬとして、カント流の嚴肅な道徳主義を實行しや

うと力めたのはその後の暫くでありました。動機が既に偽善的でありますから、當時の行の全く偽善であつたことは云ふまでもないです。爾來今日まで凡そ四年、終始偽善の生活を以て一貫して居りましたから、中には品行方正の君子人とまで誤解して居るものすら今日なほあるのではありません。筆を以て新聞や雑誌の上に書く時分には、如何にも亦君子人らしく装うたものであります。その内實は婦人をも弄んだこともある、人も欺いたことも数しれずある、その他恥かしきことと計である、自ら省みれば洵に慚愧に堪へぬ次第であります。

三十六年の夏、神経衰弱に陥つて我れながら覺束なきことを思ひ、加ふるに氣管支加答兒のために血痰を吐いたこと往々あつた。醫師の診察によると、或は肺結核にでもなりはせぬかと云ふ心配があるやうすに、自分は全く肺結核であると思ひ込んだ、少くとも肺炎加答兒にはなつて居つたかも知實は知れぬのである。大學醫院の某博士が、神経衰弱として歸國静養を勧められたのも、自分にとつては全く死刑の宣告にも劣らぬほどに感ぜられたのです。病氣といつてもさまで重症と云ふてはなく、單に暫く讀書を廢して静養するを良策とする云ふに過ぎなかつたのであるが、精神上の苦悶は實にたとふるに物がなかつた、自己の有望なりし前途が全く暗黒に葬られたと感じたのであります。

その少し以前にトルストイの我宗教を友人から借りて讀んだことがあります、讀む前までは、トルストイほどの人でも矢張り神といふやうな假設物を設けて強いて安住しやうとし

なかつた、吉田松蔭の人格とその一生涯は、此の頃から頻りに慕はれてならなかつたのです。革命！と云ふ言葉は一種の福音の如く響く、ラサール、クロンウエルと云ふやうな名は獨り洩れるのであります。

斷つておきますが、それまでに自分は社會主義に關する書物を讀んで一時は全く社會主義者でありましたが、後、高山樗牛が死にがたに唱へた美的生活論が氣に入るやうになつて、次でニイチエの極端な個人主義を眞理として喜ぶやうになつたのが私の思想の道行であります。皆、別段研究したのでも何でもなく、雑誌や先輩の口から見かぢり聞きかぢりの思想に過ぎなかつたのであります。

日露開戦の少し前に上京して、宗教に關する書物を少しく調べましたが、人生に對する疑問が益々甚だしくなり、一面生活問題のために頭を苦しめ、尙ほ思想の上にて、戦争罪惡論と戦争といふ現前の事實とに衝突を來たして如何に調和すべきかを焦慮し、近角先生の講和をそつと聽きに行つてそつと歸つて來たのは恰も此の時でありました、實に心の急かしく働いた時でありました。それ以前より精神界を勧められて非常に面白く讀んで居つたのですが、近角先生の講話を承るに及んで如來、佛陀と云ふのが如何にも難有く感ぜられて來た、本郷教會へも往つて見たが、たゞ海老名師の演説が巧いといふ外別段感動は與へられなかつた位であつた。求道學舎に行つて見ても近角先生や佐々木先生が難有さうに話しては居られるが、聞いている人達は一向難有さうにも見えない、又、熱心な求道者はツツかりかと思はるにさうでもないやうであ

て居るのだなと思つた。我宗教一卷は、伯が強て安住しやうとして安住出來ず、而も安住を裝うたる苦悶の産物に外ならぬのだらう、イヤ、彼れ自らは宗教を認めずして愚民（即ち宗教を必要とするほどの無知なもの）に安心を與へるべく作られたのかも知れぬ、と慙う思ひながら讀んだ。中ほどから何となしに書物に魅せられて少し妙な氣持になりかけたが、匆卒に讀み了つて、巧くこぢつて書いたものだ、或は本統に信仰して居るのかも知れぬ、と位に考へて置いたのを此の苦悶の時に思ひ出したのであります。が、再びそれを讀む暇もなく、郷に歸つて後宗教を研究して見やうといふ新らしい、而し微かな希望を以て、幸に心の會うたる友人の歸るを伴として、暫くは苦悶をも忘るゝとなく忘れて歸郷後も慰さめられて居つたのであります。その後は主として宗教上のことに注意を拂うて居りましたが、たゞ自棄的に遊んで居つた丈けて身軀も追々恢復し、又々生來の野心を起したがその野心は寧ろ一個の芝居氣であつたのです。藤村操が華嚴の瀧に投死したことを聞いたのは、恰も自分の苦悶時代でありましたから、非常な同情を拂うて自分も死んぢまはうかなど考へましたが、その時にヒョイと起つた芝居氣がその後いろん方面に現はれるのであります。華嚴の投死は、私の芝居氣を満足させるに十分でありましたが、その眞似するのを潔く思はなかつたのであります。併し宗教上の信仰は何となしに得られさうに考へられて居つた、たゞ芝居氣といふものが常に眞面目な求道心を碍げて居つたことを感じます。

芝居氣は芝居氣であります、その中には眞面目な主張も

る、恐らく自分ほど熱心な求道者は他に無からうなど、心に思つて居た位であるが、さて聞き了つて別段難有いとも何とも思はぬ、且つ、五劫思惟の願だの、兆載永劫の修業だのと云ふことになると、何の事やら分らぬながらに成程その場だけ有難げに聞かれるが、歸つてから靜かに考へて見ると却て滑稽なやうにも思はれる、當時浩浩洞から出た精神主義だの春の頌だの信仰坐談だの其他此の類の書物は凡そ目を通した、中には清澤先生が書かれたと思はれる文は殊に念を入れて繰り返し讀んだので、精神主義なるものは略理解が出來、之を以て絶對の眞理であると思つて居つた。とかくして人生の歸趨と云ふものだけが自分に了解されたので、たゞそれのみが嬉しく、都會の俗悪な生活は吾々の堪ふる所でないなど、思つて又もや郷に歸ることにしたのは實は生活上の苦しみがあつたからでもあるが、又、精神修養を行つて大なる自覺を得たならば思想界の革命は我手によつてなされるかも知れぬなど、信仰も得ないうちから早く既に芝居氣を起して居つたのであります。

自分は可也煩悶もあり、従つて求道の念も盛んであつたに拘らず、信仰に入ることの容易でなかつたのは常に此の芝居氣が邪魔をしたのであつたらうと思つて居ります。それと、苦悶の甚だしくなる時に直に自己を客観に置いて、批評的に觀察すると云ふ、一個の解説法が何時の頃から行はれて居つたやうである、而してそれに空想の翅を加へて小説的事柄に組み立てる、それを文藝化すると云ふやうな妙な癖が自然に無意識に出來て居るのであつた、これは確かに煩悶を慰する一個の忘却法で、酒や女色の効あると同じく効あるものと私は思ふ、そして信仰に入ることを遅らせる點に於ては酒や女色よりも一層妨げになるものではあるまいかと思ふのです。

これは単に私一個の考へて、餘事の話ではありませんが、郷里に歸つて専ら精神の修養に意を注ぎ、常に如來々々と念じて一切の行動を如來の導きに從つてやると云ふことに心掛けて居りました。「人もし怒り打たずんば何を以てか忍辱を修せん」などと思つては生來の疇癩玉も溢々收まつた譯であります。かくして居る中には、修養の結果完全なる人格を作ることが出来るだらうと云ふ希望によつて、成る丈け自分を樂ましむるものを避けるやう／＼にして寂しき生活を喜んだのであります。基督教の聖書を此の頃から熱心に讀んで見た、佛教の教がともすれば罪惡を如來に背負はせやうとの傾きのあるのが、修養を專一の自分にとつては却て面白く感じなかつたので、新約全書一卷は讀んでも起きても離さぬやうに、時に抱いて讀たこともありました。それは三十七年の十月頃からでありました。當時神と云ふ言葉より如來と云ふ語佛陀語と云ふ語の方が趣味に於て優つて居るやうに思はれて、如來、佛と云ふ語はつかひながら寧ろ基督教徒でありました。最初は佛教のために基督教を加味して居つたのでありますが、終には基督その人の人格を理想とし、それを仰慕し、憧憬し、感謝するやうに不知不識變化して來たのであります。

かく、基督の教を守ることは自分にとつて誠に苦しいにも拘らず、其中には人格は完成せらるゝに違ひない、心の欲する所に從つて則を超へざる理想の境地に至り得るに違ひない、それが天國である淨土であるとかう信じて精進したのであります。所がどうしても續けて行くことが出来ない、日々の行動は道に外れたことが段々に多くなる、心に思ふことの凡ては皆神の意に背いて居る、と氣が付くと慚愧ではない口惜しいのである、九丹の効を一簣に缺くと思ふと少しは自暴氣味になつて來る、仕方がない、此の自暴氣味になつた時に節制の反動として平素よりは恥かしい舉動行為が現はれるのであります。仕方がない、併し勵まなければならぬ、親や兄弟に心勞を掛けて、世間の人から侮られて、友人などがそれ

したことが幾度かある、信仰的生活は全くゼロになつた、戀のたのしみは殆ど心は酔ふて居つたのである、それ等のことが、慈愛深き母や兄やその他の人に心勞をかけたことはどれほどあつたか、思ひ出しては誠に耻ぢ入る次第であります。樂しき、そして云はゞ放埒な生活を送る中にも翻然として我れに返る、我に返つた時は直に神、如來の示導に從ふ、そして直に芝居氣がついて出る。が、實際自分には早晚社會的大革命が此土に下されなければならぬものと信じて居た、そして其理想の天國を此土に來たす爲めに自分等は犠牲にならなければならぬのだとは我が理性の教ふる所なのであつた。然るに情に耽り意志の弱き私は、戀せる一婦人のために全く愛の中に全化されて、赤子の如き心持になるのであつた、そして彼の女の爲めに物質的成功の望まじきと思ふた、情厚き母や兄も、矢張り美しき虚名に憧れる人である、自分も實、虚名心は中々盛てはあがるがそれは理性に從ふ時直に起る芝居氣、その芝居氣より生ずる虚名心であるから全然手段と方法とを異にして居る、が、人情の爲めに幾度も獨り泣いた、終に理想も信仰も抛つて、人情の奴隷にならうとまで決心した、其時には随分少からぬ煩悶のあつたことは勿論なのであります。

此の頃に、若し親しく語るべき友人でもあるか、師とすべき人でもあらば、非常に慰められたに違ひない、遠くに離れて無いては無いけれども、書簡の往復では逆も盡されぬ、殊に今日身の處置を解決するに足ると思ふ人はないのである、又、戀せる事實を何人にも打ち明けることは出来なかつたのである。當時、矢張り精神界を讀んで居つた、浩々洞の諸師に慰められた恩は一方ならぬものであつた、そこで、若し自分の苦衷を諒して、宗教の立場から是認の印を捺して呉れる人があるならば、自分は甘んじて奴隷的の境遇に安ずるも可なりと、思ふと同時に無上にか浩々洞の人達を慕はしく思はれ、新らしき道がそこにありさうにも思つて直に事情を具して之を佐々木樵師に諮つたのである、その答を俟つ間

ぞれ成効の道をたどり、學ぶ所を學んで居る間に自分はひとり詰らない生活をして居るのは全く精神の修養と云ふこれひとつの爲めではなかつたか、そして人格を完成し大自覺を得るのは、精神的に物質的(即ち社會主義運動)に革命の旗を擧げる基礎を作る所以ではなかつたか、と思ひ返して又勇を鼓したのであります。

それにて自らは、信仰を得て居るつもりであつたのです、又信仰と云へば信仰に違ひない、併し信仰あるが爲めに苦しかつたのである、非常な努力をも要したのである、幾度かその信仰をはなさうとしては又辛うして捉へるといふ風であつた、片時も心を許して安堵することは出来ないのです。斯くの如き際にも火は熱する風は動く、自分は曾て味はうたことなき強き戀を味うたのであります。一方には宗教的理想がある、加之、芝居氣がある、此の二つを失ふならば自分の全生命はなくなるのである、故に如何に事情が許されようと結婚など云ふことは思ひも寄らぬ話である、從つて結婚しやうと云ふ者はさら／＼無かつたのである、されば一日も早く思ひ棄て、仕舞はなければならぬのである、たゞそれを忘れることのみ努めたのであるが、努める下から戀しくてならぬのであつた、一方に煩悶しながら一方には戀の樂しみに酔ふ、樂しみいよ／＼多くして煩悶益々加はるのである、凡そ十ヶ月間、私の一生に於てこれほど矛盾せる兩面を味はうた時代はありません、洵に無意義な時代でありましたが今から思へばこれも亦導きとして難有く感謝するのであります。

兎角する中に、戀の勢力が益々加はつて來る、片時座にも堪へぬほどの思ひを

もなく京都の友人の許に奔つて、慰められんことを期した。

何時の間にか信仰と云ふものが薄らいて、同時に苦悶もなくなつて來た、人情の爲めに犠牲になるも神の爲めに犠牲になるも、犠牲と云ふに於てかはりはないと思はれた、日を経て佐々木先生の手紙を見た時は、全く心が開けたやうであつた、そうして大變に氣が落着いて來た、併しながら此の時未だ如來は我編み出した所の假の如來に過ぎなかつたのであります。

そこで着實な方針をとつて、我を愛する人の爲め我が愛する人のために、自分は出來得るだけの力を盡さうと決心して、東京に上つたのであります。その以前郷里に居つて「無我の愛」を面白く讀んだ、全く自分の抱いて居る思想と同じである、たゞ大自覺を得ることが自分には出來ないのだ、何とかして眞に絶對の幸福自由を身に味ひたいものであるとの念か上京後もまだ胸の中にあつたので、早く一度伊藤證信師に會ふて見たいものであると、早速大日堂を問ふたのである。道々から思つた、尋ねることは尋ねて見るが、今日自分は寧ろ平和な状態に居るのである、勿論姑息の平和ではあるが、此の平和のまゝでさへあらば、人々に安樂と満足とを與へることが出來、自らも幸福に送ることが出来るのである、何も教を受ける必要もなければ教を受けて却て此の平和を打ち壊されてはとり返しがならぬ、だから但だほんの容子を見るに止めておかうと、恚う想つて往つたのです。

暫く話を傍聴して居る中に益々自分のかね／＼の思想と一致して居ることを感ずる、今日の宗教家が言はんと欲して憚

つて居るやうなことも忌憚なく説いて居られる、これは面白い、とつくづく感心して聞いて居た。が、自分と違ふ所は確かな實驗のあることである、尤も絶對々々と無暗に振り廻はされても矢張り人間だから、肉を離れない限り全く平等に愛を瀧ぐなど云ふことは出来得べきではない、そはたゞ、人を牽ゆるための方便として言の奇矯に走つたものに外ならぬのだと考へながら、其日は自分の精神に波瀾を起されんことを恐れて別段何事も話さなかつた、全く安心を得て居るやうな顔して、得て居るやうな話をして歸つたのであります。浩々洞へ佐々木先生を訪ふて御禮を云ふつもりであつたが行き過ぎて、氣がついた時は日が暮れさうであつたので、次の時にと思つて訪ふことを止めたのです。

その後宗教上のことを考へて居つては、母や兄の厚意に背くやうに思はれ、成るだけ餘計なことを考へる暇のないやうにと友人を訪ふたり驅け歩いたりして思案に耽ることを避けて勉強にとりかゝつたのである、が、感情的社會主義たる自分は、物質的の成功を自當に呑氣らしく學事に従ふことは何となく其心にとがめられてならぬ、殊に例の芝居氣がまたむら／＼と起つて来る、身を横たへて靜かに考へる毎に自分の今行つて居ることが何だか馬鹿らしくならぬのである、と同時に戀人の面影が目前にちらつく、母のことが氣にかゝる、これでは不可と思つて聖書を讀む、矛盾を感じる、獨りホロ／＼と何とも知れず涙がこぼれて来るのである、が平素は成るだけ忘れるやう／＼の方針によつて紛らされて居る、實は煩悶なまゝ云ふほどのものではなかつたからであらう、兎に角紛らされて居つたのであります。

併しソットと考へかけると堪らなくなる。伊藤師は斷然我執を取らなければと言はれる、友人に諮つても矢張り愛だの戀だのを捨て、仕舞はなければ眞の愛も眞の戀も得られなると云ふ、自分にも理屈はさうに違ひないと思ふ、人に相談さ

られるのである、迎も書物を讀んだ位では駄目だと諦らめて了つたのです。

時に恰も河上法學士が、無我愛の實驗を得られたと云ふ告白を讀賣新聞で見た、此の一事は自分にとつて非常な警醒であつた、實際無我愛を體得するならば、妻子や財寶や名譽や地位やそれ等のものを弊履の如く捨つることも敢て難しとせぬやうになるのは確かに事實なのである、されは、今でこそ自分は肉身の情を無視するに忍びぬとして居る、儂なき戀をすら捨つることが出来ぬのである、が、屹度無我愛の自覺を得ることが出来るに極つて居る、佛陀、如來とは此の愛に外ならぬのである、と非常な希望が新らしく湧いた、早速大日堂に伊藤師を訪ねたが、さて聞くこともないのである、聞いた所て實驗は得られるものではない、それに無我苑の人達にでも遇ふと煩悶も直になくなるのである、歸つて直ぐ河上氏を訪ねて實驗の容子を聞いた、氏は我を捨てればよいのだ、もう直ぐだと言はれる、自分も直ぐさうなれること、信じて希望が増したが、我を捨てると云ふことは迎も出来ぬ、命を捨てる位は芝居氣だけでも澤山だけれども、一切の我を捨てるといふことはこれは何處までも不可能のことである、理屈は幾ら聞いても同じであり自分の方か寧ろ能く分つて居る位なのだから、何でも一つ實行が肝心だどうとか良い工夫がないものかと考へたのです。

此に言ひ落したが、自分は昔て苦悶の時に小實驗を得たことがある、眞に宗教的實驗であつたかどうか知らぬが、或る夜人が擁護まつてからひとり雑多の妄念に馳られて悶えて居つたが、どうも眠られず、たゞそれを拂ふ爲めに神々と云ふことを一心に念じて居つた、何時のほどにか眠りともつかず現もつかず、ス

ればさう答へるに極つて居るのだ、が、實行は出来ぬ、戀を捨てやうと思つたにけりても死にさうな感じがする、何とかそこに開ける法はなからうか、さうだ佐々木師を訪ねて見やうと思つて中求道學舎と云ふことをフト思ひ出した、日曜を俟ちかねて近角先生の講話をさくべく行つたのである、聽いてる中にも益々煩悶が加はるやうである、これは一つ直接に教を受けなければならぬと思つて、四五日を経てから訪ねした、その四五日は同じことをばツかし考へて居つたのであります。

先生を訪ふたが生憎な晩であつた、が、差支のあることを聞いて残念とも何とも思はなかつた、どうせ聽いた所て直ぐ分るものでもない、寧ろ自分で切り開く方がいゝかも知れぬのだ、と慫う思つて引返したのです。翌日の日曜に學舎へ行つて講話の前に少しく話をさし、講話もさし、その後また忙がしい中に話を承つたが、その中に自分の思ひ違ひして居つたと氣が付いたこと一つ二つあつたので、何だか光明があるやうな心持がした。それから求道の九號と信仰の餘瀝とを頂いて宅に歸り、少しく目を通したがどうも感心せぬ、本氣に讀む氣が起らぬ、佛陀は慈悲の塊であると聞いて佛陀は慈悲の塊であると繰り返し／＼念じて見たが自分には何の感じもない、他人の寢語をはたて羨ましがつてると同じである、我を捨てんと欲すれば捨つる能はずと云ふのも、成程その道理に違ひない、が、さればとて捨てやうとしなければいつまでも此のまゝである、それでは何にもならぬ、たゞ「肉體は心靈の牢獄」と云ふプラトンの語のみが、今更のやうに味は

ツと廣々とした天地が前に開けて何とも云へぬいゝ心持になれたのである、不思議に思つて眼を開いて見ると障子に月の映つて居るのが能く分つて居る、そして元の我は障の上に横はつて居た、復眼をふさぐと又元の天地が前に開ける、その心持を失ふまいとして居る中にもう已んだ、時に二時か三時までの間で凡そ七八分もつゝいたろうかと思ふ、其時の心持は後にも思ひ浮べられたが、それは一種異様の快感である、所論見神の實驗、宗教的光輝とも此の實驗の鮮かなものに外ならぬものであらう、果して然らば之を忘我の境と云ふは可、見神の實驗など云ふのは余りに大袈裟な云ひ方ではあるまいかと思ふ。精神的肉體的に苦悶をするか、一心不亂何事をか念ずれば何人でも此の如き實驗は得られるのであつて、信仰の基礎となるには甚だ確かなものたるに相違ないが、これは信仰そのものとは別なものであつて、私は余りに重きを置くべきではないかと思ふのであります。

これは話が横に外れましたが、その後だゞ實驗を得た人の言語動作によつて、自ら神通會する所もあらうかと、河上氏を慕うて遊びに往つた、傍に居る時は幾分感化を受けるものか煩悶は次第に薄らぐ、が、宅に歸つて獨り考へるとまた直ぐに曇つて来る、よし、どうかしてあの大喜を身に味はう、體得しなければならぬと、躍氣となつて「求道」第九號の捨身求法の處を讀んだのであつた、釋尊求法の熱心はこれほどであつたかと思つては、自分も身を捨てる覺悟にならなければとて得られぬ、得らるべきものではない、か、さて身を捨てるとなると何でもないやうな感じがする、畢竟今の境遇が余りに幸福に過ぎて腹の底まで泌み通らぬのである、かと思ふと何でもないことはない、母や兄弟のことを考へ其他のことをいろいろに思つてほろ／＼と涙がこぼれて来る、これは迎も身を捨てることは出来ぬ、死ぬることは自暴的に死ぬるけれどもそれは身を捨てたのではない、といろ／＼に

考へた末は何か一つ犯罪を犯すといふことに思ひ及んだ、自分分は僅かな名譽や友人間の信用を頼みにして居る、肉身の愛情、殊には戀人の同情などが自分を喜ばせて居ると一通りでない、少しばかりの學識も將來世の中のために働かうの幸福に暮らさうのと云ふ考のもとである、之は何でも捨てなければならぬのであるかさて、今捨てよと強いられても捨てられないものではない、況や自ら捨てやうと云ふに於てをやである、宜しく自然に捨てさせらるるやうな方法をとるのが最上策である、それには簡易な犯罪を犯す、窃盜などが最も良い、然らば監獄に入ること出来る、名譽も信用も自ら捨てられる得やうと思つても得られなくなる、さうだそれが一番だと思つた時、流石に熱い涙がこぼれたけれどもかく決心した時ほど心の落ち着いた時はなかつた、妙に希望が湧いて（或は今から思ふと例の芝居氣が混つて居つたかも知れぬのです）いよゝ實行すればそこから屹度道が開けるに違ひないと確信して寝についたのです。

此の時の心持は實に平安であつた、非常な希望がそこに現はれて嬉しくて眠られなかつたほどである、實に何とも云ひやうのない心持でありました。

翌日眼を覺まして見ると、何たか慙う身軀が軽く思はれた何時も變らぬ御飯が殊に旨い、處が別段故と罪を犯す必要もないやうである、今それを行はなくても自分の仕度いまいにやるなら、屹度それ相應の苦痛を受けるに違ひない、名譽も信用も愛情も自然に無くなるに違ひない、今監獄に這入れなくても何時か入ること出来るに違ひない、自分が今頼つて

は其實は皆他力であつた、我が計らひだと思つて居つたことが皆自然のはからひであつた、そして今日かく歎ばせてもらふのも、此の告白を書かせてもらうのも、矢張り自然の計ひである他力である、過去の罪惡も煩悶も皆深い／＼意味のあつたことを今知らせて頂くのであります。そして私にはたゞそれだけが嬉しいのである、難有いのである。過去の凡ては他力の計らひであつた慈悲の方便であつた、今もさうである、明日の事は豫側が出来ぬ、死後の事も勿論知る事が出来ない、が、過去も現在も善きに計らひ給ひし如くに未來も亦善きに計らひ給ふことは疑ひやうがないのであります。どう云ふことが善いことであるかは、過去に於て分らなかつたごとく未來に於ても分らぬのである、過去に於て泣き怨み怒り悶えたごとくに今後も亦泣いたり怒つたりすることがあるに違ひない、併しながらそれもまた善きに計らはせ給ふ方便であるから泣きたいまゝに泣き怒りたいまゝに怒れば又善きに計はせ給ふのであるとだけ信じて居ります。かく信じて居る此の信仰がまた何時狂ふものであるかは私は知らぬ、併しながら此の信仰を興へられたのも他力なれば取らるゝのも他力である、我が心は秋の空の何時曇るかも計られぬけれども、曇るべくして曇り晴るべくして晴るゝ一に皆他力である自然である、少しも我が力ではないのであります。

かくの如く信じて、此の信を興へられたる廣大の御恵みを謝し、過現未にわたる一切の罪惡を謹て如來の責任に負はせ奉る。

居るものをも自然に捨てらるゝ時が来るに違ひない、何も自分で求める必要はないのだ、求めずとも得るものは得るのである捨てる必要もない、捨てなくとも自然によりて奪ひ取られるのである、自分の仕たい放題にするならば苦しみは自ら来る幸福はちのづから奪ひ去られる、その時が即ち光明の天地の開ける時である、自然の導きによつて、自然にきたはれて、自己の力は少しも用ゐなくても眞幸福の天地は來るのである、と、かう氣が付いた前後から無上に嬉しく感ぜられたのです。

嘗て自分の力て何一つ出来たことはない、一切皆他力であつた。今まで自分は一鉢何を苦んで居つたらう、何を求めて居つたらう、大歡喜の實感ではないか、その實感は、自然に得させられるのである、賜はるのである、どんな罪の深いものでも自分の力て何事を爲さずとも、此のまゝで得させられることは疑ひないのである、と知つたその時に直ちに得られたではないか、實に不思議である、求むる念を斷つた時に却て求むるものは此に得た、何と云ふ言葉で云ひ現はして可いか、一種妙な感じが起つた、此の時の歡喜と感謝とは、私をして絶対に他力本願に依憑するに至らしめた動機であつて、即てそれは佛の慈悲を身に親しく味はふことを得て初めてあつたのであります。

かくの如くにして私は此の上なき幸福な身となつた、これが佛陀の慈悲であるか神の愛であるかそれは知る所でない、兎に角自然のはからひである他力である、我が力我が計らひは少しも加はつて居らなかつた、我力だと思つて居つたこと

研究

讀書漫錄

○輪廻

常盤大定

佛教の輪廻説が、毘陀教の思想を繼紹したものである事は勿論であるが、兩教の間に大に相違のある所を注意せねばならぬ。毘陀教に於ては、天地萬物は皆梵より出て、梵に還るといふ汎神思想よりして廻輪説を立つるので、人の靈も梵より流轉して物に觸るゝや、頗る汚るゝものとなり、之が梵に復歸するには、幾多の生死を歴て、清淨のものとなつてからせねばならぬといふのか、其廻輪説の大體である。而して汎神思想より見る時には、天地萬物には皆生命あるを以て、輪廻すべき區域も、決して生物にのみ限るものではない。或は金石にもならうし、或は土塊にもならう。其區域は甚だ無限である。所が、佛教に於ては、此輪廻思想を繼紹して居るけれども、其哲學的の着色は全然之を脱却して、因果應報を教ふべき倫理の着色を以て之を活用して居るのである。先づ梵の思想を捨て、之に代ふるに善惡の業を以てし、且つ靈魂を立てず、猶又彼は本來法爾の力によりて輪廻するものであるけれども、此のは自己の所作によりてするのであり、而して

輪廻の範圍は、彼のは無情のものにまで及ぶが、此のは有情のものにのみ限りてある。如何程道理が積んで居ても、吾人は金石土塊となると思へぬではないか。硯や筆が吾人の祖先であるかも知れぬとは思へぬではないか。彼のは哲理上に於ては、よしまさりて居ても、此の實際上に於て活きて居るに到底及ばぬ。是は佛陀の實際家たりし一證と爲すに足ると思ふ。

○婆羅門

婆羅門なる語は、種姓を指す時と、また毘陀教を奉じて規定の生活を送る再生の三姓を指す時とある。再生の三姓といふのは、婆羅門姓、刹利姓、毘舍姓をいふので、是等は等しく勝利民族でありて、服従民族の首陀姓に對して再生族として誇りつゝあつたのである。是等再生族の目よりは、首陀は再生族で本來自よりして同一人間ではないので、甚だ疎末のものとして輕侮せられたものである。佛教の經典中には、沙門婆羅門と并べ擧ぐる所が甚だ多いが、此時には、沙門と婆羅門との間に徑庭はないので、其意味は同じなものである。此婆羅門の語は種姓よりいふのでなく、一種の生活を送る入道者をいふので、即ち前に擧げたる治者の方に屬する。

○婆羅門教と佛教と

佛教が婆羅門教の影響を受けたといふ事は、能く人の注目する所であるが、然し佛教が婆羅門教に影響せる事は、まだ多く注意する人がない。此兩教は後來に至りてこそ甚だ相違あるに至つたが、當初は甚しく反對したものではなく、兩々仲よく發達したものである。支那の高僧の印度紀行より見る

に成れるものさへもある。勿論佛教の經典の如く、一々其成立年代を定むる譯には行かぬが、佛教と同時に於て、尤も多く成立したものと思はるゝのである。

○ピダゴラス、プロタゴラス

希臘哲學史中のピダゴラスの輪廻説とプロタゴラスの懷疑説とは、必ず印度に關係あるに相違ないとの見地よりして、ピダゴラスといふのは、ピタグル、プロタゴラスといふのは、アルタグルの轉化であらうといふて居る人がある、グルといふのは梵語で、師といふのである。一顧すべき説であらうと思ふ。殊にピダゴラスの一生は頗る注意を要する。その旅行せしといふのは、いづれに旅行せるものによ、而して其學説のみならず、其教團組織の狀況といひ、其教規の有様といひ、東方的着色を有する事の多きは、一二に限る所でない。

○西人の着眼點の正不

西洋人の着眼點の奇抜なるには往々感心する所があるが、時によると實に噴飯に堪へぬ事もある。ピールが起信論の思想を以て基督教に負ふ所があるといつた事だの、またエーベルが印度のクリシナ天とクリストとの間に連絡があるといつた事だのは、此類だが、更に笑ふべき事がある。それは獨乙のシロフネルが阿彌陀佛を以て、アミクタスの事であらうといつた事である。アミクタスといふのは、安息だか大變だかの王の名であるが、此王の古錢には、アミタと刻したものが現存して居るとの事だ、これよりしてシロフネルは奇抜に過ぎたる思ひ付きを出したのである。クッペンは先づ之を疑つたが、エーベルも亦之に關して疑を擧げ、後には流石のシロフ

も、法顯傳に於ては、兩教の間に多くの衝突を見ぬが、玄奘傳に於ては甚しき争論の状況を見る。そは兎もあれ、印度教は、佛教の前後に於て著しき相違を來したものである。佛教以前の毘陀教といふのが相應するし、佛教以後のは婆羅門教といふを適當とする。其相違あるは何に因するかを考へねばならぬ。是は全く佛教の影響に起つたのである、其教會の有様は勿論だが、思想までも大に其面目を新にして居る。予は彼の三位の如きは、全く佛陀の三身より脱化して來たものと信ずる。或人は其世界迷妄論は起信論などより來つたものであらうといふて居るが、佛教以前の思想に反照する時は、或は左様かも知れぬ。何にせよ、佛教の活潑々地たりしは、實に目ざましきものであつて、傳導上に於ても、思想上に於ても、少しも沈滞がなかつた程であるから、予の見るところに従へば、佛教の思想は、常に他教よりも一頭地を抜いて居た様に思はるゝのである。近世の印度教は誠に話にならぬ程に、腐敗墮落したものだが、然しこれも亦佛婆兩教混交の餘弊のみ残つたものらしい。兩教間の交渉關係を調査する事は甚だ興味ある問題である。

○ウバニシャッド

ウバニシャッドの哲學といへば、唯古い／＼もの、様にも思ふが、古いのは、僅かの部分に過ぎぬ。而して其古いといふのも、佛教以前に遡る事、左程遠くはない。之を古い／＼もの、様に思ふのは、今では古い説である。扱て同じくウバニシャッドといふても、阿育王以後に成立せるものもあるし、紀元後に成れるものもあるし、甚しきは回々教徒の侵入以後

ネルも其考を捨てたとの事である。洋人の説には往々にして斯る事があるから、頗る注意をせねばならぬ事である。

○佛陀出世時代の世界

時勢が英雄を造るものが、英雄が時勢を造るものか、兩者の間には面白き關係があるに相違ない。多分兩者は互に因となり縁となるものであらう。佛陀が西曆紀元前六世紀に當りて、中印に於て、人天の大導師として、法輪を轉ぜられし時の世界を見ると甚だ面白い。印度に於ては、政治上の方面より見れば、北方の強たる波斯匿大王あり、南方の強たる頻婆沙羅大王あり、教學上の方面より見れば、六師外道なるものありて、互に幟旗を樹て、其中に於て尼乾若提子の大勇が最も勢力ありた様である。是は中印度の事だが、西印度に於ては毘陀教の勢力は非常であつた。人は皆佛陀の出世と共に毘陀教は全く其勢力を失つた様に思ふたらうが、それは中印の佛教傳播の範圍内といふので、西印に於ては、非常の勢力を有して居たに相違ない。恒河那莫那河交叉の以東は佛教の勢力範圍であるが、西は毘陀教の勢力範圍であつたのである。本生談を見るに、中印よりして、西の方徳叉尸羅國に遊學せる事が往々に見えるのは此爲である。勿論後には揭陀が文明の中心となつたけれども、教學の中心としての五河地方の位置も容易には失墜しなかつたものである。本邦に比較してはいは、佛陀時代の印度は、鎌倉時代の如きものでもあつたらうと思ふ。鎌倉は政治の中心で、隨て漸々文明の中心たるべき運命を有して居たけれども、京都の勢力も容易に侮るべからざるものがあり、殊に其教學は頗る見るべきもので

あつたのである。然し文献の徴すべきものが少いから、當時の西印の英傑を知る事が出来ないのは遺憾である。

事は餘談に互りたが、佛陀と殆んど同時に於て、支那の思想界には老子と孔子との二大聖賢が出現した。當時は戦國時代であつて、此二大聖賢の外に、幾多の思想家が紛起して、支那文明史上に於て、頗る光彩を放て居る事は、人の能く承知して居る所である。眼を轉じて波斯を見るに、サイラス、ザリアス、ダーキセスの如き大王が相次いで出現して、或は西方希臘を征し、或は東方五河地方を侵略し、東西文明の接觸を起すの媒介を爲した。ゾロアスター聖の出現せるも、この頃であらう。他にも幾多の思想家が出てたに相違ない。又リチアには、クロイサス大王があり大福長者として世の羨望する所となつたが、ソロン聖の一割に遇つたとの事だ。扱又埃及にはフサメチタスあり、羅馬には、セルキウス、ツリウスあり、またゼルサレムに於ては、豫言者エゼキールの出現ありしが、時にネブカトネザルの爲に一掃せられ、幾多の零碎的史話を残して居る。若し又希臘を見れば、頗る文化の域に達して居たもので、ペリクレスはまだ生れなかつたがライカルガスがスパルタに法典を布いた當時であつて、其思想界より見れば、ピタゴラスあり、アナキシマンデル、アナキシメネス、ゼノファネス、バルメニデス、アナキサゴラスヘラクライトス、エムペドクレス、プロタゴラス、ソフホクレス、ゼノイあり。聖ソクラテスもあり、更にまた、アナクレオン、サッポあり、猶またソロン、エソップもあつた。是等諸國民の中に於て、獨り希臘が大に人物を出したのである。

に於て六師外道といふのが佛典中に於て能く見える。六師の中に於て、最も其勢力を張つた尼乾子の開祖大勇は、佛陀と同じく王士の中より出たのである。此外に所謂六派哲學中の數論や、論理派などは、矢張當時のものであつたらう。かくて後に初めて佛陀の出現を見たのである。基督以前の猶太の教學界を見るも、幾多の預言者が相次いで出てたものである。中に於てヨハネの如きは尤も有名である。歴史は繰り返すものであるから、以て之を今日に徴する事が出来やうと思ふ。近來救世主とか又は神佛とかの自信を以て、大に世に呼號するものが、頗る多いが、これには何か大なる意味を含んで居りはすまいかと思ふ。少くも人心が眞摯に向ふ一端を示して居るに相違ない。吾人日本民族の前途も頗る多望である。

光明の、大夜をあらはれみて、

法身の光輪きはもなく、

无碍光佛としめしてぞ、

安養界に影現する。

久遠賢成阿彌陀佛、

五濁の凡愚をあらはれみて、

釋迦牟尼佛としめしてぞ、

迦耶城には應現する。

まい。希臘に於ては殊に文献の徴すべきものが多しから、以上の如き諸大人の名を知る事が出来るのである。希臘に次で知らるゝのは、支那と印度であるが、其他の國民に於ても、必ずや之に劣らざる盛況を呈したるものと思はるゝのである。されば、佛陀出世の時代は、實に世界の史上に於て、人心の動搖の甚だかりし時代で、いづれの國民も、内に對屈せる氣力を思想上に於てか、又は活動上に於て、發露せしめんとて、其噴火口を求めつゝありし時代であつた。東西兩洋の思想界に交渉の起つたのも、必ずや此時代よりせしものに相違ない。かゝる時に於て、佛陀の出現ありしも、無理ならぬ事と思はる。

○救世主の出現

佛陀の出現も、一朝一夕の故ではなかつたのである。是よりさきに、僧權萬能の弊極まりて、王士族は大に之に拮抗する様になつたのである。ウパニシャッドの思想といへば甚だ有名なるものであるが、今日の思想よりいふ時には、先づ新派自由討究派たるに過ぎぬ。而してこの思想の先驅を爲したものは、毘提河王闍那迦であるとの事だ。當時王權の擴張と共に王士族の思想界に於ける努力も、亦甚だ注目すべきものであつて、闍那迦王の外にも、澤山の王族が此深重なる人世問題に冥想したもので、僧侶族が却りて新派の門に遊んだ事も随分多かつたものである。斯の如く王士族の間に、人世問題に關して、成立宗教の教權以外に立ちて、眞摯なる考察が起つて、後は非常の勢を以て進んだものと見えて、多くは今日に残らぬけれども、其中に於て、六師外道といふのが、佛典中

講義

嘆異鈔

近角常觀

序説

竊シテ惡ク案スル祖ク勸ム古今ノ異ニ先ニ師ノ口ノ傳ニ之ノ眞ニ信ニ思フレトシテ後ニ學相相繼之疑惑幸不レ依有緣知識者爭得レ入二易行一門哉全以自見之覺悟莫レ能力宗旨仍放親惡聖人御物語之趣所留耳底聊註之偏爲三同信行者之不審也云云

「彌陀の五劫思惟の願を、よく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身に於てありけるを、たすけんとせばしめしたちける本願のかたじけなさよ。これが親鸞聖人の平素の御述懐であつた。つくづくこの言葉を味はひ奉るに、實に廣大無窮の御慈悲があらはれて下さるゝ。親鸞聖人一代の教化、つゞまるところ聖人がこの自誓の披瀝にすぎないのである。聖人が眞宗の骨目を示したまひし『教行信證』の開巻劈頭に「竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を渡するの大船、無碍の光明は無明の闇を破するの慧日なり」と仰せられたは、この彌陀の五劫思惟の願を、よく案ずればひとへに親鸞一人が爲なりけりとの實感

である。難度海といふも、親鸞か現に沈淪しつゝある此世の有様である、無明の闇といふも親鸞か胸中の煩惱をもつて蔽はれたる有様である、しかるに佛はこれを救ひ、これをてらしたまふのである。無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな、生死大海の船筏なり、罪障おもしとなげかざれ、これ如來の親鸞一人にむかひたまひての招喚の呼聲である。かく如來の呼聲をうけたまひし聖人は『さればろくばくの業をもちける身にありけるをたすけん、ねほしめしたちける本願のかたじけなさ』と感謝したまひし御尤の事である。

『教行信證』の次の文に「然れば淨邦緣熟して、調達闍世をして逆害を興さしめ、淨業機あらはれて、釋迦韋提をして安養をえらばしめたまへり、これ乃ち權化の仁、齊しく苦惱の群萌を救濟し、世雄の悲、正しく逆誘闍提を惠まんと欲してなり」といへるも同様の感謝である。親鸞聖人の眼中には、提婆阿闍世の逆惡も、韋提獄中の待信も皆是親鸞一人がためなりけり、「大聖ねのおのもろとも、凡恐底下のつみひとを逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり、あゝ、そくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしたちける本願のかたじけなさ、提婆も我なり阿闍世も我なり、韋提も我なり、我等がごとき凡恐底下の罪人を救ひ給ふ大悲大慈のありがたさ、願力無窮にましますば、罪業深重もあもからず、佛智無邊にましますば、散亂放逸もすてられず、實にそくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしたちける願力のさわりなきことを感謝し給まふ聖人の御述

こばゞ、世によしあしはなきものを、この如來の御恩をばいたさずして、是非邪正のみ口にすれば、勿体なきことなり、聖人既に「是非ならず邪正もわかぬこの身なり」と仰せられしにあらずや、たゞなにごとさしなきて、如來の御恩だに一度感じ來らば、何事も皆如來の御力にてよきにはからひたまふべし、この如來の御恩を感じざるとか、浮ぶと沈むの境なり。煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもて、そらことたわごとまことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにてれわします、何事はない、この如來のまことに着眼せよ、この念佛を信ぜよ、親鸞において、たゞ念佛して彌陀にたすけられまひらすべしと、よきひとの仰せをかふむりて、信ずる外に別の仔細なきなり」とたとへ彌陀の誓願不思議である、名號不思議である、無義の義である、自然法爾である。法然上人の仰せられた通りである、「法然上人にすかさねるらせて、念佛して地獄に落ちたりとも、更に後悔せぬのである。かくのごとき親鸞聖人の仰せによりて我身の罪も如來の御恩もしらして頂いたものである、何事も親鸞聖人の仰せられる如くである、親鸞聖人を信じまいらせて地獄に落ちたりとも更に後悔すべからず候といふが即ち著者が聖人の自督に對する信仰である。故に、この嘆異鈔を拜讀するものは、また此著者が聖人に對せられたと同様の心持になつて拜讀せずば、其眞意を味ひ奉ることは出來ぬのである。これしはらくもわすれてはならぬ第二の用意である。

著者は既にかくのごとき信仰を以て聖人に對せられてその一言一句について深く信じて居られたが、聖人在世の當時よ

懷なり。今此嘆異鈔は、かくのごとき聖人の平素の自督感謝

をさしたまひし御弟子の一人が聖人の仰をそのまゝを筆にせられたのである。これ歎異鈔を拜讀したてまつるにつきて、暫らくも忘れてならぬ心持である。かくのごとき聖人の自督を直接うけたまはりたまひし歎異鈔の著者は、如何にこれをいたさたまひしか、既に歎異鈔の結文に於て、前記の御述懐をあげ、直ちに、これを仰ぎて曰く、「さればかたじけなくも、わが御身にひきかけて、われらが身の罪惡の深きほどをもしらず、如來の御恩の高きことをもしらずして、まよへるをちもひしらせんがためにてさふらひけり、まことに如來の御恩といふことをばさたなくしてわれも人もよしあしといふとをのみまうしあへり」と、これ著者が聖人の自督をさしてよろこびたまひし著者自身の自督である。あゝわれらが身の罪惡の深きほどをもしらず、われらは相當に善人なりときめこんで居るのである、如來の御恩の高きこともしらず、口に如來とはいひながら、晝夜に如來の矜哀を蒙りつゝあるといふことを、しみじみと感せず居るのである。聖人彌陀の大悲大慈は親鸞一人がためなりけり、とよろこびたまひしは、則ちこれ、彌陀の大悲大慈は、我等一人一人の爲なることを御身を以てしらしめたまふたのである。親鸞のごときそくばくの業をもちける身なりといへるはまたわれら一人一人の身の上をかへりみれば實に罪惡深重煩惱熾盛の人間たることを御自身の身をもつてしらしめて下さつたのである。結局かくのごとき罪惡深重のものを、見はなしたまはぬのが、如來の御恩である。この如來の御恩だによる

り滅後にいたりて、その眞意を理解せずして、或は聖人の言葉ばかりを擬して信仰をよもひあやまり、或は聖人の仰せになき事を仰せといひまぎらはし、甚だしきに到つては論議問答を主として、其争論に勝つ爲に何もかも聖人の仰せといふ様な傾向を生じ來つた、この現象を眺めて著者は實に腸を斷ち、血を吐くがごとき思をして嘆息せられたも無理ではな。全體信仰の言葉は信仰に入らなければ其味を味ふことは出來ぬ、そこで眞實信仰に入らざる人が聖人の言葉だけをきいて、勝手に自分の考を以て種々の事をいひふらすものゆゑに如來に虚妄を申しつけまいらせ、或は聖人の徳を汚し奉り甚だしきに到りては著者は聲を勵まして「法の魔障也佛の怨敵也自ら他力の信心かくるのみならず、誤つて他をまよはさんとす、謹しんで恐るべし、先師の御心にそむくことを、かねてあはれむべし、彌陀の本願にあらざることを」と嘆息せねばならぬ様になつてきたのである。其異論異義を歎き遂に文字にあらはれたがこの歎異鈔である、故に信仰の書物は何れも上にあげたる二個條の用意は常に忘れてはならぬが、ここにこの書に於ては、最も此點に於て深く注意をせねばならぬ。なほ精密にこれをいへば、この書は單に信仰を正面から寫したるのみでなく、殊更に異なる信仰に對して其異點を深く戒むる爲に筆をとりてある故自然に親鸞聖人の信仰の特徴が著しくあらはれてある。それゆゑ此書は他の書よりは拜讀したてまつる者が深く感じ奉る次第である。なほわかりやすくいへば、われわれの心を穿ちて信仰をよび起さるるに最も力強き聖教である、これ現時の求道者が信仰を開らく

鍵として此書に無上の味ひを見出さるる所以であります。既に、此書の目的がかくのごとく、きわどき信仰をいひつめてあるものゆゑ、求道者のためには、信仰を開らく鍵であるだけ、それだけ求道心の切實ならざるものには、頗る驚きを興へる次第である。本書に於て、最も著しきしく書がかれたる、悪人救済の德音の如きは、道求めざる者に向つては少しも了解出来ざるのみならず却つて、かくのごとき極端なる救済をとくは、道徳上有害にあらずやなどといへる杞憂を抱く様になる。現に近頃、求道者が本書を金科玉條として、これを貴ぶだけ、それだけ、他の一方には頻りに倫理界の評論に上りつゝある。恰もこれ著者がこの書をかかれし當時に起りつゝありし異論異義と同様に於て論議問答を旨とし結局佛陀に對する信仰を有せぬ人である。此點に於ては、信仰問題に千古同様の事を反覆するもので現時、學者間に於てこの書に對して、疑をさしはさむは寧ろ此書本來の目的を達しつゝあるものである。信仰の言語は信仰なきものに、理解されないのは當然である。理解されないものゆゑに、是を疑ふ、疑ふた結果不安を感じる、不安を感じるところで、自己の薄弱な事を自覺し、遂に絶對救済の光明に浴する様になるのである。されど其の絶對救済の味ひを感じるに到るまでは、如何様にしても了解できるものではない。こは恰かも宗教的人格に對する信仰と同様である、たとへば親鸞聖人が法然上人と同時に流罪にあひ給しとき、これをなほ、師教の恩致なり、と喜びたまひたる如くである。信仰の局所はまわりどをいものではない、信ずるか信ぜないかといふ一言で左右を決する

ことが出来るのである。かく宗教的人格に對する信仰なるものは、絶對的なものである、そのごとく信仰の局所をあらはしたる書物に對しては、絶對的にこれを信ずるか、又は絶對的に信じられぬかの二つの場合よりゆるさぬものである。然して此書はこれを信ずるか、これをそしるかを決すべきりつめた問題を提出されたのである。さらば、如何にして味へばこの書を一言一句悉く信じ得る様になるかといふに、それが最初に此書を読むに最も深く用意せねばならぬといふた二點である。即ち一つには、聖人の自督自身なることを味ふ事、二つには、其自督は則ち我等が自督たるべきことを味ふ事、これを一括すれば讀者諸君がわれこそ罪惡の極にして、われこそ如來の御恩に浴する者なりといふ信仰に達せられたとき歎異鈔の文々句々は則ち諸君自身の信仰の告白として味はれる極になるのである。こは文々句々の講義によつて其境に到るのではなく、もし此書の中一句でもこれこそ我身の上のこととなり、我心をそのまゝうつされたるものなりとの信仰が起つたとき乃ち此書全體が諸君自身のものとなるのである。よつて書の味をしるには諸君自身が實驗的に佛陀の慈悲に接するのが第一である。故に本書の講義は從來の教理の研究、法門の取扱等を主とせずして諸君に直接如來の御慈悲に接して貰ふ様に勉めるのを其目的といたします、そして私自身が佛陀の御慈悲に接したる實驗を書き、これを歎異鈔の問題としたのが私の嘗て著はしたる「懺悔録」であります、参考に供せられんことを望みます。以上は本書の性質を明らかにして、これを拜讀するの用意を示したのであります。

嘆 咏

吾は迷ふ

左 千 夫

衆に從はむか佛に從はむか
衆を捨てずば佛を追ひ難し
人の世にありて人と伴はさらば
月日のめぐる四つの時
人と樂む時はなけむ
吾亦人間の一人もて
人間を疎むは道なりや
吾は迷ふ道とは何ぞ

衆を捨てずば佛を追ひ難し
佛に背き衆に從はば
吾は人間の價なけむ
一切の生物皆活ける世に
人とあらずば何の爲にか活く

人間の望みは唯歡喜
價ある歡喜は佛を慕ふにあり
吾は迷ふ人間とは何ぞ
聖書は全き聖人を傳へず
迷ひの袂霧いよ／＼深く
あはれ光明眼に失はんとす
現世の聖人いつくにかある
知れざるの罪か知らざるの罪か
人は言ふ追求即ち光明
追求止まざれば光明滅せずと
吾は迷ふ光明とは何ぞ
蒼天の星蒼天の月
徒らに寒し汝か光り
地上の草木地上の山河
只物さねと存するのみ
願ふ一切萬有の要を知り
あらゆる天地を喜び見む
嗚呼……
聖人いつくにかある

小の書齋

甲 之

漆黒く塗りし文机
書二三冊、紙の切れ
繪の本など散らしあれど
こゝに小さき秩序あり。

壁にはりたる毛物の畫、
くだ物の畫に隣りする
色に刷りたるくさくさの畫、
そを眺めつゝ讀むとなし
讀む書、かくとなしかく畫、
一日暮れ又一夜過ぎ
汝は其日を送るなり。

いとけなきをば吾に知り
われと求めず與へのまゝ

心足りつゝ、庭鳥の

さけびに目さめ學びやに
畫をすぐして、夕日照る
障子の内に一人居る
汝をし見れば心たのしむ。

都にさかり居る吾が
冬の休日歸り來るを
指折り數へ、門のへに
さしる車を吾もやと
心をゆらに待つ夜半を
ともし火の下汝にあへば
樂ぬしき思胸に溢る。

いとけなき身は天つちの
廣さかなかにしがちゝはば
しか兄弟をたゞたのむ
かなしき心幸くあれ。
をみな子なれば家の光ぞ。

友の文見て

常 音

たまはりし文の巻きく繰りかへし見る夜はたぬ
し一人ありとも

我が心知る人まれと書きて來し其の文見れば胸い
たぐさ

現し世はつれなくあらん然れども友のまことはい
や著るし

こゝろなく眺むる庭の二々の上枝下枝にみ力こも
る

天つちの美しき思へば我がこゝろ常鳴る海と高ま
さかへる

天つちの美しき力は今や我が額のへ平に注ぐがど
とし

限りなき妙のながめや天つちは今人の世の影も止
めず

前號正誤 千本銀杏最後の二首

廣前は栴あかるく宮代やつきの建物おほに知るべし、
宮をかこふ大銀杏は夕空の明りに映ておほにかいよふ、

時報

昨年の求道會

○求道學會日曜講話 佛陀の御恵みによりて、一年間毎日
隨佛徳を讚嘆し奉るを得たり、殊に昨年は最も求道の氣運著
るしく、絶對の信仰に入り、慈悲の燈明に接觸せるの人頗る
多かりしは不可思議なる事實也、殊に毎月最終に開ける信仰
談話會の告白は吾人が面り佛陀の光明を拜し奉り、人生の上
に下したまひし如來の御恩を感し奉るの好因縁たらざるはな
し、吾人は常に其眞面目なる告白をさく毎にかくまでも普く
佛の御心の人々の心の上に力を加へたまふかに仰嘆して言の
出づる所を知らず、吾人は新たなる得信の人々を通して常に
大なる確信を與へたまふを感せずばならず、げに求道學會の
日曜の曉ほど情らかにして尊き感の溢る事ことあらず、實に
此日は一週間の心垢を洗除して光明の淨土に棲み遊ぶの想あ
り、殊に告白會の時平坐團樂いかに隔なく飾なく、嚴かに、
美はしきは今更言ふを要せず、昨年中出席署名の人々は左の
如し。

近角常規、長尾芳滿、山本榮順、篠崎隆規、上野智隆、松原晴二、黒田最勝、近
角常音、竹中賢惠、山本ない、風尾なつ、常光泰、須藤よう、馬場はる、齋藤
久、沖島さよ、服部君代、原田さか、吉田ちる、小島よし、池田とよ、關本
しゆん、河口せい、田島末、波佐谷みち、長谷川まつ、岡宮その、二宮はる、高
田ちやう、島靜枝、高坂ひる、同ひさ、菊地しげ、木村まき、上關とみ、渡田恒

岩田ゆき、川口ちよの、岩井ちとせ、富田りつ、八十島みどり、近角きと、朝倉曉瑞、重山眞、佐伯正、藤井寛、無海田秀孝、園井清雄、海野寛、伊東東一郎、高木量、加藤純、無海田眞、森信丸、高木勝一、武岡義政、山下有隣、三上道賢、伊藤儀助、築波行信、桑山從尊、福山多八、平山幹雄、山下汎、本谷暢音、坂野寛、角田雄三、工藤重五郎、和才誠司、立花慈海、石黒良縁、吉本一耶、東海夫、三井甲之助、警井育美、山下成式、萩野伸三郎、小河滋次郎、神野忠武、久保田岩夫、保倉智保、高富士徳成、脇谷謙、梅井ちよの、大久保たま、伊藤秀、大石ひで、田中ふく、島しづゑ、宇野はつ、田尻まさ、村田ふぶ、木下たか、井波さき、金丸あきの、渡邊智空、戸次法栄、安藤現隆、長澤歸道、高光大船、武鑑龍眞、藤川慶道、福田行徳、巨谷法垂、海野登洋、長峰訓計、朝日真寛、松田久丸、岡本清一郎、桃林進、石山雅龍、藤法子英、都甲昂、瑞穂直、佐藤双葉、林嶺岳、極尾治、鷲澤法城、須中理喜、藤高秀超、玉野玄陵、前川敬雄、松岡勲信、堀合由巳、鹿島敬敏、増田基治郎、藤原秀峰、吉岡清光、吉田弘賢、川船直次、青原自彰、福元一二、弘中兼善、原田龍三、揚子玉、海野英俊、前波善學、豊田久和保、神谷稔、相澤小彌太、樋口龍雄、田中徹、工藤達、木村介寛、龍華行彌、萩野ふさ、野村やう太、木橋かお、若槻木滋、岡崎安次郎、岡田彌徳、遠山壽雄、原田龍二、金波敏秀、松本盛城、林嶺岳、木室修一郎、木室みつ、小西とよ、井上さち子、萩原千代、三宅貞子、水野よし、白鳥きん、島津みち、齊藤さき、梅田芳、福井野治五郎、坂東性剛、山名龍宣、宇野いね、進谷ふみ、宮崎はつ、石川千代、吉原光一、道立次郎、河村省一、隈井節男、本澤一爾、金波敬視、白神秀夫、道元淨見、藤澤内雄、波岡茂輝、佐々木智郎、松倉眞、岡谷法龍、泉道雄、稲葉清隆、長光院成、佐々木春親、小紫晃香、山縣とく、淺野せん子、國頭つれと、和田鹿枝、福井明、朝倉晃應、山名龍宣、杉野がれ、葛西兵馬、大勝芳樹、城榮太郎、尾崎庄兵衛、木藤長、石川富春、八田興一、清川つれ、平松健一、小林ふさ、徳永さだ、越智英代、河口つれ、飯野光、番場健造、松葉專成、梅田等、引地高庵、美佐撫治、志村伴治郎、川村貞治、本宮彌共彌、中村千代吉、小野助逸、八十島基、銀田至靜、西本道圓、青樹波水、谷内正順、佐々木きくの、八瀬三代子、才田とせき、橋川つとむ、丸茂むね、丸山清作、竹内彌納、福井藤吉、春日嶺岳、森信丸、長沼龜道、安村行雲、堂前久七、松永有賢、田尾宇兵衛、八十島いそ、

池山榮吉、伊藤正雄、津田野敬一、石野準、上野啓造、渡邊雷乗、木山十彩、築波行信、深川信六、藤等忍、梅津せつ、倉掛やま、磯部てい、草光まつ、津田三枝、小西寅之助、西川藤吉、吉原辰司、田中常松、若尾勢龍、河多旭十郎、南條秀照、佐藤要人、島中雄三、音喜多政治、

○女子信仰談話會 第三日 曜日 に於て殊に女子の人々のみ熱心に道を求め法を喜ばるゝ會合なり。昨年來殊に『嘆異鈔』を講本として深く親鸞聖人の信念を仰ぎ奉るゝ實に謹嚴にして信仰深き會合なり、其出席の人々左の如し。

淺田つれ、岩田ゆき、馬場ぼる、常光泰、小島よしの、吉田ちよ、才田外世賢、中島さよ、風尾なつ、土屋保子、近角きと、能美喜美、若井ちとせ、八十島みどり、同いそ、川口ちよの、服部きみよ、齋藤さき、中島さよ、吉田ちよ、河口せい、田島すみ、兒玉ませ、關本しゆん、須藤よう、大村かつ子、神崎梅、小村さく、篠井常野、能勢やす、大久保玉、齋藤久、原田きみ、三宅貞子、天沼柳、末永しむ、水野せい、松尾さと、井上はる、野澤やす、鈴木眞佐伯みれ、井波さき、小塚千賀、保田かめ、水野よし、大洲文字、進谷文、中島さよ、島津みち、白鳥きん、井上はる、成田龍瑞、吉田木か、丸茂むね、河口つれ、和田しか枝、井上さち子、井上つるゑ、萩野あけ、一宮春、上關とみ、飯田ちう、竹田けい、國島つれ、島しづゑ、田中ふく、高坂ひえ、淺野せん、高山間代、井波さき、藤島かよ、津田三枝、大石ひで、橋川とく子、金井すみ、島井いと、長谷川みれ、藤田よれ、入銀美代、梅津せつ子、藤村美登、青柳利、高梨はるの、倉田穂、古澤しえ、清宗すま、宮崎やす、中井すえ、山田すな、池田とよ、中野英

○第二求道會土曜講話 一昨年頃は熱心なる求道者は求道學舎に集り來りて第二求道會(九段坂佛教俱樂部)は寧ろ其門を親はんとする多き傾向たりしが昨年に至りては俄かに一步を進め來りて第二求道會は最も切實なる求道者を以て滿たされ求道學舎は熱心なる求道者に加ふるに得信者の多數が益々法味を愛樂するの趨勢を來たせり、是れ如何に信仰の氣運が

進みつゝあるかの明らかなる徴證也、殊に第二求道會は求道者諸君か開法の因縁を開くが爲に最も好機會を與ふるが如し、吾人は何心もなく聲めつゝある講話が、知らず識らずの間に如來の則に従ひつゝあるを覺るに至りて、實に無上の感謝に堪へざるなり、第一土曜に信仰談話會を開くこと恰も求道學舎の有様に同じ昨年中の出席署名の人々左の如し

近角常親、大川富次郎、北御門八郎、原田龍三、越山尚藏、石橋勝、佐藤清、小水貞一、關二十郎、西脇正吉、井山碧、牧虎藏、藻谷三磨、海島寛三郎、水野靜重、中村千代吉、土田安五郎、竹内伸夫、佐々木修一、大森貞輔、福場幸一、山川瓊次、伊澤那藏、木中賢恵、小澤一、山路健之助、樋口龍雄、渡邊知空、石川慈恵、宇間殿、若澤精三、岡崎諭幸、安田忠雄、山田半助、杉原正夫、奥野七郎、吉田美知、中野廣三、欠畑文雄、堀凌二郎、深水清、城江武天、蝦名順泰、堂前久七、佐竹靜夫、武岡義政、中村龍造、細野傳次郎、進谷淳藏、安田謙一、佐々木金、天野、木谷暢、三宅伸一、森正直、川船直次、八木恵明、相樂秀直、奥田木一、松下、前川、橋秀留、歴屋祐攝、福田宗太郎、無海田秀孝、市江滿量、小川健之丞、工藤重五郎、大即莊生、堀勝次郎、伊藤長次郎、越山常藏、平山智、無海田眞、和田水城、増澤繁、本島市助、馬場儀一、茅野美念野島健吉、與世隆之、若槻木滋、豊福親盛、西田往峻、高橋家藏、早瀬常一、伊藤儀助、若山いね、砂田竹次郎、内山貞治、安田忠雄、黒柳泰慎、原馨、坂野覺、谷村幸藏、小澤文隆、松原詔二、李厚本、下瀬亨藏、都甲昂、今村守衛、井上まさ子、岡本大明、金津勇進、奥野七郎、太田天城、芝田理八、浦野定敏、柳田猪吉、小成徳三郎、下島格助、稻垣勝治郎、森千年、齋藤彌作、佐々木甫、武岡義政、菅原鎮、鈴木信治、上田よし子、今井さと、池水良七、砂田竹次郎、仁科みさゝ、樋高いし子、伊藤惠博、夏原由三郎、吉田信夫、白橋精一、安田文精、竹本彌平、荒井鑽治、立田郁、山本睦、藤原信吉、太田天城、今津枯種、兒林照透、中川彌一郎、大本壽琢、直殿續、木多可實、小島含笑、善井俊順、卷田平太郎、片岡武男、柳瀬光子、山名了彌、山口達雄、山眞深内、天門成章、龜川萬三、寺師静二、河野らい、田厚麻然、生駒浪雄、同陽雄、竹本朝太郎、牛窪徳太郎、佐藤比呂之、堤芳雄、清水宣隆、三輪常禪、吉田穠、梅津せつ、同

善二郎、島添皆葉、野崎行滿、同齋子、安藤就美、今井文麗、立花慈海、矢那倉藏、安田文精、安達弘眞、竹本朝大、岡田文基、小城信、内田弘毅、宇野順田尾宇兵衛、追立次郎、酒井宮吉

○第三求道會講話 一昨年來日本橋俱樂部に於て毎月一回開會し來りしが、昨年九月已後、日本橋彌敷町説教場に於て之が開會することとし、本年よりは毎月必ず二日の夜を以て開會することとせり、抑日本橋地方には從來相應に信仰盛なりと雖未だ青年實業家の間に健實なる信仰起らざるを以て之が振作を勉めむが爲に特に本會を設けたる所以也、而して熱心なる求道者は三年來終始渝らず、中には家庭信仰談話會を設くるの運に向へる人を生ずるに至れり、吾人は信す一たび下されたる佛種は必ず縁熟の時あるべきを、殊に吾人は各種社會活動の人々が信仰を以て生命となし、眞摯忠實其職に勉めらるゝに至らむこと切望に堪へざる也。

▲求道學舎日曜講話題
廻向の意義(十二月二十四日) 女子信仰談話會
還相廻向(十二月卅一日) 信仰談話會
絶對の希望(一月七日)
永久の平和(一月十四日)

▲第二求道會講話題
信仰は人生の活力也(二月二十一日) 女子信仰談話會
粉骨碎身(十二月廿三日)
新生涯(二月六日)
聖尊の重愛(二月十三日) 信仰談話會
信仰内面の光景(二月二十日)
▲第三求道會講話題
慈光照耀(一月七日)

三界無安、猶如火宅、衆苦充滿、甚可怖畏、常有生老、病死憂患、如是等火、熾然不息、如來已離、三界火宅、寂然閑居、安處林野、今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子、而今此處、多諸患難、唯我一人、能爲救護、

前畧御免被下度候

拙子義布致旁阿富汗西坦を徒歩横断し印度に出づる豫定にて同盟會の事務は臨濟の天岫氏に譲り、佛教講話は當分ベダッタ教會のアベダナツダ氏(印度人)同教會に於て繼續する事と致し、去る十月十八日紐育を出帆、伊太利、シ、リ、ク、リ、トの諸島、希臘、小亞細亞地方を経て去る十五日當地着、明日の便船にて黒海を渡りバクに赴き更に裏海を越て波斯に入り獨歩阿富汗に進入致し候も、自ら生還を期し申さず、加之目下通行路たる露領は非常の騷亂中にて最早書信の程も覺束なく存じ候間茲に謹みて生前の辱交を御禮申上げ置き候、時下護法の爲め御自愛可被下候、

先は右御報知旁御禮迄匆々不具

十一月二十一日
 近角先生 梧下
 一天四海、皆歸妙法、令法久住、廣宜流布、

コンスタンチノブルに於て
 鈴木 錦

東北 三縣 饑饉救済に付大方の
 義捐を乞ふ

日露の戦争は終極を告げて滿都の人々は殆んど毎日歡呼して此の勝利を祝し凱旋の將士を迎接するに忙しいといふ有様であります、然し我々は獨り此の喜びと嬉しさに酔ひて一方には苦みと悲みとに涙の絶え間のない國民の澤山に居ることを忘れてはすむまいと思ひます、この度の東北三縣(福島、宮城、岩手)の饑饉の慘状は、實に我々豫想の外に出て、居ります、殊に其の最も甚しき地方に至りますと米の産額は絶無と言つても決して差支がありません、一般中流以下の人々は、今日では種々の草木の葉、或は樫の實などの類ひを以て僅に飢を凌いで其の日其の日を過して居るといふ状態にて此等の食物の分析の結果を見ますと、眞に無害に腹が満たされるといふだけで、毫も身體の養ひとなるべき成分はないといふこととあります、勿論各地方應に於ても此等の憐むべき窮民を救助するに就いては、出来るだけの方法を講じて手を盡しては居るのであります、然しながら、何分多數の人ではあります、果して此等の方法が満足に効果を奏するやも甚だ危まるゝのでありまして、且つ目下の急を救ふには仲々此等の方法のみに依頼して居つたのでは、とても安心する譯には参りませぬ、天下の仁慈深き人々よ、此等の窮民の中には、其の一家を養ふべき力とたよるべき男子が己が一家一族のか

ゝる悲惨の狀に陥るべしとは夢にも知らず、安んじて滿洲の野に屍を曝して居るものも少なからざることを記憶せねばなりません、戦争が漸く終へて飛び立つ様な嬉しき心を抑え、喜ぶ家族の顔を見んとて故郷の門邊に立つた時、一家の父母妻子が骨立ち、肉落ちて泣きに泣きくづれて居るといふ憐れな話しも數多きことを知つて貰はねばなりません、特に今や此の地方嚴寒膚を刺すばかり、雪は毎日降る、仕事は出来ぬ、堀るべき草根も、摘むべき木葉も、最早盡き果てました、我々は微力のものであります、此の現状を目撃し、其詳聞を耳に致しましてからは、一時も晏然として居るに忍びない氣が致します、謹んでこゝに此等三縣の頼りなき人々に代り、敢て世の仁人に訴へんとするものであります、思ふに諸君一盞の酒を節するも、また以て窮民の心を慰むるに十分なるものがあるてありませぬ、我々は必ずしも、其額多きが故に其の功德大なりと言ふものにはありませぬ。

義捐金は一口金五錢以上とす
 義捐金募集期限は本年三月三十一日迄とす
 東京市淺草區山之宿町十九番地
 東光社内
 佛敎 主義 新聞雜誌聯合會

追て右義捐金應募各位の御便宜を計り本所に於て御取次可申く尙ほ右御芳名は本誌に掲載可仕候
 求道發行所

精神界

(一の六) 新年號

定價 一冊十二錢六冊六十五錢 十二冊一圓二十錢
本號に限りて廿四錢郵税不要

有限無限錄

この篇は師か生前半紙百葉位の冊子に手記せられたる宗教道徳哲學上の諸問題に對する觀想錄也聊か求信者の要求に應ぜん爲めに冊餘頁をあてて全部を録す

涅槃篇

○無我觀上の二方面
○平和と阿育王
○乙巳詩稿

信仰上の示談

○凱旋歸國の前日
○日誌中の清澤師
○三部經上の清澤先生
○道徳と宗教
○マリンダ王問經
○わか春
○別離

求安の道程

○歎異鈔を讀む
○我は幸なる者也
○歳暮雜感
○草堂夜話

罪の綱縫と懺悔 ○歴史已上の佛陀
悔恨なき回顧 (本領) ○地理已上の淨土
發行所 九七九村 浩洞

多田 會我 南條 吉田 曉 南條 佐々木 小田 見忠 人見 鳥次 曉 鳥次 和谷 三 大元 三 岩元 周 曉 鳥次 安藤 本州 多田 田一 鼎

思想界の革命兒(本月廿五日發行)

▲毎月二回 ▲一部二錢 ▲郵税不要 ▲郵券代用一割増 ▲見本往復はがき

無我の愛 第拾六號

▲無我愛は個人をして直に絶對的眞理絶對的幸福絶對的自由を得しむるの道也
▲無我愛は自己の運命を全く他の愛に任せ同時に全力を献けて他を愛するの主義也
▲雜誌「無我の愛」は既に無我愛の大道を体得したる無我苑同朋の實驗録也

●無我愛と科學 ●絶對の愚者と絶對の智者 ●絶對の弱者と絶對の強者 ●絶對の貧者と絶對の富者 ●絶對の自由と絶對の束縛 ●絶對の長壽と絶對の短命 ●絶對の確信と絶對の疑惑 ●絶對の矛盾と絶對の調和 ●經濟學者に與ふ ●質義解答 ●論語を讀む ●新生物の發生 ●財産上の我執が余が信仰の經過 ●道を求めよ ●閉目開目 ●我が懺悔 ●人生問題の自覺 ●筆の滴 ●獲信の記 ●無我苑生活 ●第三分苑より ●同朋會記事 ●四面呼應 ●傳導チラシ等

發行所

東京巢鴨 無我苑

近角常觀著

信仰之餘瀝 第七版

定價 上製 二十錢 並製 十五錢 郵税貳錢

發行所 東京市本郷區 四丁目五番地 文明堂

賣捌所 東京市本郷區 森川町一番地 求道發行所

近角常觀著

懺悔錄 再版

(附録「歎異鈔」)

定價 貳拾錢 郵税貳錢

發行所 東京市本郷區 春木町 二丁目二十一番地 森江分店

賣捌所 東京市本郷區 森川町一番地 求道發行所

舊臘小兒死去仕候爲め歳末年始缺禮候間御許し被下度候頓首

近角常觀

規定

- 一、本誌は毎月一回(一日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
- 一、但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべし
- 一、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
- 一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵税一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

- 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
- 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十八年十二月廿七日印刷
明治三十九年一月一日發行

發行兼編輯人 百目木智穂

印刷人 白土幸力

發行所 東京市本郷區 森川町一番地 求道發行所

大賣捌所 東京市神田區 神保町 東京堂

同 本郷四丁目 文明堂

講話

毎日曜午前九時

求道學舎

(本郷森川町一番地)

毎土曜午後二時

第二求道會

(九段坂佛教俱樂部)

毎月二日午後六時

第三求道會

(日本橋蠟燭町説教所)

參聽
隨意

求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しくして、益々信仰の必要を感じ、一般の道義の制裁弛み去りて皆嚴格なる實行を想ふ。此に於てや青年學生にして眞面目なるものは、確實なる信念を握まむとして胸中幾多の苦悶を抱き、社會實務の人にして志操清淨なるものは其理想を實現せむが爲に、人生問題の解決に辛酸を嘗めざるはなし。嗚呼信仰の饑渴現時の如く劇しきはなく、求道の志此く如く切實なるは未だ嘗て見ざる所也昨年已來。聊か此の時運の必要に應せむとする微志あり、先輩の企てられし跡を引續きて、一方には求道學舎を設け、此等の道を求むるの人々の寄宿に充て、寢食を同じくして共に實踐修行に勉め、また一方には日曜講演を開きて眞面目なる人々と共に心を清めて信仰の問題を講し、互に心靈の修養に従ひしが、幸に佛陀冥祐と、師友同情とによりて其期する所空しからず、學舎は常に諸員にして幾多の申込に負き、假會場に充てたる居間は狹隘を訴へて求道の人々を容るゝの餘地なし、此に於てや止むなく、懇切なる道友の勸告に従ひ、學舎を擴張し、會館を設立して以て焦眉の急に充てむと欲す幸に篤厚なる先輩の指導に従ひ、忠實なる親友の贊助を仰き、着實なる實行によりて漸次其結果を擧げむことは實に不肖の至願也。

從來首都に於て佛教徒に屬する會館の設なく其の不便を感ず事一日の事にあらず。而して賑々計畫せられて、未だ容易に實行の緒に着ざる所以のものは、蓋し其規模大にして完全を期すればなり。故に先づ現時の必要に應ずべき適宜の會館を設立して、漸次其大なるのに進むることを欲す。是先づ本會館の建設を企圖して佛教者一般の需要に充て且つ清潔なる社交の中心に供せむと欲する所也。予遊の際、泰西青年會の組織の會館及設備等を初として、幾多の社會的施設を詳細調査し來りて、此等の事業の我國佛教者の手に成らし事を望む實に切也。本會館建設の如き若し燎原の一點火たるを得ば幸之に過るなし。冀くは四方同感の諸士不肖が微衷を諒察せられ協力贊助し玉ほむことを謹て白す。

明治三十六年十月

發起者 近角常觀